
アケボノハイツ五〇五号室

岳石祭人

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

アケボノハイツ五〇五号室

【Nコード】

N6965V

【作者名】

岳石祭人

【あらすじ】

何故か人が居着かない505号室。幼い娘を連れた夫婦が新たに入居するが、一家はわずか3週間で部屋を出ることになる。その間経験した恐怖の怪現象。

一 深夜の帰宅（前書き）

ご注意

年齢制限をR15としましたが、一部、女性にとってたいへん嫌
だろうと思われる描写がありますので、嫌だな、と思われる方は読
まないでください。

一 深夜の帰宅

菊池俊典は工場用の大型製造機械の会社に勤め、東京本社勤務であつたのがこの地の工場に大型の注文が入り、製品の納入と共にメンテナンスとして同工場に出向することになった。こちらに常駐で、一応二年間の予定である。

俊典一人単身赴任でも良かったのだが、娘里香はまだ就学前で、妻佐緒里と共に親子三人こちらに引越すことにした。二年間の予定だが、生産性と品質の成績次第では同社のもう一つある工場にももう一セツト導入してもよいという話で、そうなればこちらでの滞在は更に延び、俊典は専属の技術者としてこちらの会社に移動という話もある。この不景気で大手の正社員でもリストラの脅威に戦々恐々していなければならぬご時世、あまり出世は望めなくとも専門技術者として雇用が保障されるなら悪い話ではない。まあ何ことも上手く行けばの話で、そうなればならで俊典一人の問題ではない。妻と娘がこちらの生活に満足してくればの話でもある。

引越して一週間、月曜の夜である。

さつそく機械の不調で遅くまで残業になつてしまった。コンピュータ制御の繊細なセンサーが複数付いた精密機械でもあるので最初の内調子が悪いのも仕方ない。幸い昼間だけの稼働なので製産終了後一人で残つて調整を行った。ここで頑張つてなんとしても機械と、自分の信用を勝ち取らなければならない。

帰宅は午前になつてしまった。

こちらの新居は

「アケボノハイツ」

という、かなり年季の入つたマンションで、二年で本社に帰るにしろ本格的にこちらで人生を送るにしろ、ここは仮の住みかだ。東京でも同じような賃貸マンションで、里香が小学校に上がる頃にはちゃんとした将来住み続ける、出来たら、家に、住みたいと、今は

出来るだけ儉約して貯金を増やしたい。同じような東京のマンションに比べて、うんと家賃は低い。まあそれだけ古いのだが。

大通りから一ブロック入り、左手に「我が家」が見上げられた。五階の五〇五号室だ。ハンドルの上に首をかしげて見上げると、ベランダに面した窓に青い光が見えた。他はあらかたまっ暗だ。あの色はテレビだろう。妻が起きて待つてくれているようだ。そういえばこちらでは深夜韓流だの台流だののドラマをやっていて、新聞のテレビ欄を見て東京で見逃したドラマをやっていると喜んでいたっけ。夫の帰宅を待つにかこつけて夜更かしして見ているのだろう。俊典は微笑んで、前を向き、建物を過ぎると駐車場に左折していった。

ステップを上げて中に入ると、各部屋の郵便受けが並び、階段があり、緑色の扉のエレベーターがある。遅くなつて疲れている俊典だったが、階段を上げることにした。この古いエレベーターはどうも嫌いだった。深夜のエレベーターなどどこでも嫌なものだ。

汗をかきながら五階まで上がり、やっぱりエレベーターにすれば良かったかな子どもじやあるまいしと苦笑いしつつ、五〇一から順に過ぎ、五〇五号室。都会人の用心深さで表札は入っていない。他はだいたい入れているようだ、ないところもある。部屋は全部埋まっているそうだ。やっぱり家賃が魅力なせいだろう。

鍵を差し込み、そうつと回す。うっかりすると鉄のドアで「ガンッ」とひどい音が響く。

ドアを開け

「ただいまー」

と小さく挨拶した俊典は、真っ暗な室内に『あれ?』と拍子抜けした。奥の居間で妻が起きてテレビを見ていると思ったら、真っ暗で、起きている気配はない。上がってくる間にドラマが終わつて寝てしまったのだろうか? それなら寝入りばなで「おかえりなさい」と一言言ってくれそうなものだが。

「別の部屋だったか」

ちえーつとがっかりし、ドアの脇のスイッチを押して電灯をつける。しらじらした蛍光灯に玄関とキッチンが浮かび上がる。

「ただいまー……」

小さく言って半分開いた寝室をそつと覗く。薄掛けを胸まで掛けて妻と娘が眠っている。くー……と寝息が聞こえて、やっぱりすっかり眠っていたようだ。

「ぐっすり眠っちゃって、起きないものかねー、不用心な」

間取りは玄関から伸びる中央の廊下を挟んで右に、キッチン、寝室（小さな）書斎。左に、洗面所兼脱衣所と風呂場、トイレ、居間。となっている。

カバンと腕に抱えてきた背広を置きに居間に入ると、テレビにハードディスクに録画中の赤いランプがついていた。ワイシャツの襟をくつろげながら洗面所に入り、そーつと格子の入った曇りガラスの引き戸を閉めた。

裸になって風呂場に入り、さつとシャワーを浴びたいところだが、音がうるさいので断念して、湯船からお湯をくんで体を流し、入った。沸かし直しをせず絶妙な生ぬるさだが、汗をかいた体に蒸し暑い夜でちょうどいい。

はあ、あ、と人心地つき、手にすくったお湯で顔を洗い、ぼんやりユニットバスのクリーム色の壁と天井を眺めた。狭いながらも楽しい我が家、大して面白い仕事でもないが、妻と娘と家族三人、十分幸せな人生だよなと思う。高望みさえしなければ、生きていくことなんて十分楽だ。

もう一度お湯で顔を撫で、『うん？』と嫌な感触に顔をしかめた。手に長い黒髪が数本まといつき、顔に引っかかって、指で拭って取った。気がついてみれば、

「なんだ、ずいぶん抜けてるな？」

長い女の髪の毛が湯船の表面に浮かび、中に漂っている。

「里香の相手で忙しくて気がつかなかったか？」

俊典は通常五時上がりで、娘里香を風呂に入れるのは俊典の受け

持ちになっていた。娘を風呂に入れてやれるなんて幼い子どもの内だけだ。里香は悪戯好きで、なんだかんだと遊びたがってなかなか大人しく上がってくれない。妻の奮闘ぶりを想像して微笑んだが。「それにしてもこんなに抜けて、やっぱり環境が変わってストレスかな？」

俊典は主婦たちの昼間の生活は分らないが、それこそドラマの中では団地妻たちの間でお互い家庭の内情を探り合うどろどろした関係があったり、ママ友たちの間でもそうだが、そういったことが実際にあったりするのだろうか？ 先週日曜日に越してきて、一階の管理人と、同じ五階の各部屋に親子三人で挨拶回りしたが、その時の住人たちの様子は、フレンドリーで、みんないい人たちに見える。同じ階ではないが、里香の通う同じ幼稚園の子が二人いるし、小学生、中学生の子もいる。小学生はともかく中学生でこのマンション暮らしはちょっと可哀相な気がするが。まあ、何ことも最初の内は、だ。

「リラックスして、頑張ってくださいよ、奥様」

俊典は髪の毛をまとめてすくって、手を振って排水溝に捨てた。

「ふうー……」

ぬるいお湯が火照りといっしょに疲れを抜いていってくれるようで気持ちいい。どうせこのまま流すお湯だから汚したってかまわないだろう。佐緒里、妻は、残り湯を洗濯に使うのを嫌う。もったいないなあと思うが、それは臭いがして嫌なのさそうだ。ならばと俊典はタオルを湯に入れてごしごし体をこすり、洗うのはこれですませてしまうことにした。頭も浴槽から上半身だけ出してシャンプーをごしごし泡立て、おけでざっと流した。

「さあて明日も早いんだ、上がって寝るか」

と思いつつ、心地よさにのんびりしてしまう。このまま寝ちまつたら朝には風邪をひいてるかな、なんて考えながらふふふと笑い、心地よさに目を閉じ、いつの間にか本当につとうとしてきてしまった。

湯についた口からぷくぷくと泡を吹き、ずるずると沈んでいき……

俊典は頭までずっぱり潜った水中で目を開け、とつさに飛び上がるうとし、かえって足を滑らせて湯船の底まで逆さまに沈んでしまった。目を丸くして見上げる水面に、黒い影が揺れた。浴槽の縁に手を掛けて起き上がろうとするのだが、まるで胸に重石が載ったように体が上がらず、手足を暴れさせてバシャバシャお湯を弾かせた。水面を見下ろす影が揺れ、俊典はぐるんと下向きになって、今度こそ足をしっかり着いて水しぶきを上げて立ち上がった。

「ウエツ、ゲホツ、ゲホツ、ゲホンッ！」

俊典が激しく咳き込んでいると、ガラガラと脱衣所の戸が開き、風呂のドアが開かれた。

「あなた、何やってんの？」

大騒ぎしている俊典をパジャマ姿の妻が呆れた顔で眺めた。

「あ、いや、」

鼻がツーンとしてまだ咳き込みながら、俊典はかつこわるく言い訳した。

「風呂から上がろうとしたら底がぬめって転んじやった」

「あらまあ」

と呆れた妻は、

「そんなに汚れてた？」

と、ちよつと嫌な顔をした。

「ああ、いや……」

と言いながら俊典は、そういえば妙に手のひらがぬめって、体がべとべとするなと思った。

「ああ、入ったまま体を洗っちゃったから……」

妻は呆れて。

「まあ……、いいけど。ご近所迷惑ですからね？お静かに」

「はあ……い」

俊典はぼやきながら、ちらつと排水溝に黒々溜まった妻の髪の毛を見た。妻は、

「遅くまでご苦労様です、あなた」

と、ニツコリ笑った。

「お、おお」

俊典も、妻に裸を晒して照れ笑いを浮かべ、

『まあ、いいか』

と思った。

佐緒里はチラツと夫の下半身を見て、

「おやすみなさあーい」

と、引ッ込んでいった。

上がり方、俊典は妻の髪のをつまんで、くずかごに捨てておいた。

お湯の中から見た上から覗き込む影は、暴れて立った波の陰だったのだらうと思う。

二、テレビ

夫を送り出し、娘を幼稚園に送つてくると、主婦佐緒里はとりあえず暇になった。掃除洗濯に忙しい忙しいと言いながら、それが終わってしまえば特にやることもない。里香も幼稚園に通うようになったし、そろそろパートでも始めようかしらと思いつつ、一〇時を過ぎると佐緒里は昨夜ハードディスクに録画しておいた韓流ドラマを見ることにした。お茶を入れてスタンバイオーケー。リモコンを操作して、撮れてる撮れてると、ファイルを「決定」した。

お茶を飲み、軽くお上品なクッキーを頬張り、美男美女の「まあ！なんてこと！・・・」と波乱の連続のドラマを楽しむ。劇的すぎる展開に思わず身を乗り出しながら、『ないわよねー、これは』と、笑っている一方の自分がいる。いいじゃない、ドラマなんだから、美男美女なんだから。このすぐお隣の別世界のリアルなおとぎ話という距離感が絶妙なのよ。と、安いばるマンションの一室で気分だけは優雅な有閑マダムなのであった。

でも、

安い、古い、と言いながら、

部屋はきれいなものである。

一年前にリフォームしたばかりだという。その後自分たちの前の住人が入ってきたが、入って二ヶ月で、急な仕事の都合で引っ越していき、その後ずっと空いていて、自分たちが「ラッキー」にこの物件を見つけて入居した。

地域の賃貸物件案内で見つけ、不動産屋を訪れ、築三十年ということで、それにしてもずいぶんお安いなと思いつつ案内されて来てみれば、思いがけずきれいな部屋だった。確かに建物の外見は古いし、エレベーターもなんだか動きがぎこちなく、そこかしこに古さを感じさせる物はあったが、部屋だけはぴかぴかだった。古いコンクリートはかえって材料を贅沢に使っていて頑丈だなんて話もある

し、骨組みがすっかりしていて、住む部屋がぴかぴかで、おまけにお安くて、素晴らしい掘り出し物じゃないか！？」

しかしそれだけ条件がいいと不安が生まれる。何かあるんじゃないか？ 例えば……殺人事件のあった部屋だとか……？

「いえ、そういった事件はございません」

不動産屋のおやじは苦笑しながら言った。ハンカチでやたらと額を拭いているのが怪しい。

「ただですね、新規の人は入りづらいようなんですね。他の皆さん、五年十年二十年と住み続けているお知り合いばかりで、まあ、大きな家族のようなものですねえ？」

新入りいびりでもあるのだろうか？

「敬遠されるのも困るんですが……、まあやっぱり古い建物なもので、音が響いたりするんですね。それでまあ皆さん暗黙のルールのようなものが出来上がっていて、新しい人が入ってくると、なんとなく、窮屈な感じがするんでしょう……ねえ？……」

おやじは物問いたげに主に佐緒里を見て言った。そういうことは今までも同じような賃貸マンションに住んでいた佐緒里にはなんとなく分かる。娘里香がもっと赤ちゃんの頃は夜泣きにずいぶん氣を使っただものだ。

「ま、そういうわけなんですけど、どうでしょう？小さいお子さんのいらっしやるご家族様にはかえってよろしいんじゃないでしょうかねえ？ スーパーも近いですし、小学校も、幼稚園もありますし、お医者も近所に内科と外科とありますし、住環境はとてもよろしいと思いますよ？」

他にもう二件マンションとメゾン式のアパートを見せてもらったが、値段と言い設備と言い広さと言い、この「アケボノハイツ 五〇五号室」が一番良かった。

仮契約をしていったん東京に帰り、もう一度訪れて里香の幼稚園の入園申し込みをし、入園可能と言うことで、ここに決め、親子で引っ越してきた。佐緒里は正直東京を離れるのは抵抗があったが、

もう花の大学生でもフレッシュOLでもなくなって、都会に固執する年でもないだろう。結婚して子供が生まれて、主婦として堅実な生活を営んでいかなくてはならない。

夫はもしかしたらこのままこちらの工場に転職するかも知れないと言う。技術系の営業員という役職で、もともとあまり器用な人でもないの、得意なメカニックの仕事で雇用が保障されるのなら人はほっと出来るのかも知れない。夫を愛する妻として、地方都市の住人に殉ずるのも幸せな女の一生かも知れない。

なーんて、NHKのドラマの主人公みたいな気分を味わいつつ、今はお茶しながら韓流ドラマを楽しんでいるのだ。幸せな主婦よね？と思う。

「うん？」

どうも…、画面に時折四角いノイズが走るのが気になっていたが、見ている内にだんだんそれがひどくなってきた。

パタパタパタと、縦に斜めに白いブロックが走り、それがだんだんひどく、周りの画像まで引きつるようになり、更に、更に、更に、大きな崩れがガサリガサリと渦巻き状に動き、画面の四分の一から三分の一くらいまで我が物顔で広がってきた。

なんなのよ、もう。

せつかくのイケメン俳優が台無しで、イライラしながら、

ディスク記録型のデッキではなく、テレビに直接USB接続する外付けハードディスクだ。

故障かしら？ ハードディスクは消耗品だって言うし、どうせ故障するならパパのスポーツ中継の時にしてくれればいいのに。てんでケンカなんか出来ないくせに今どきボクシングなんて好きなんだから。あんな野蛮なもの、里香の教育によくないわ。あーあ、買い換えなくちゃ駄目かしら？ 他にも韓流スターのコンサートとか入ってるのにい。あーあ……。

本当に本格的に駄目になってきた。もう画面の半分以上画像が壊

れてしまって、なんだか別の、変な映像が紛れ込んでいるみたい
 感じた。ガサゴソとうごめいて……はて？ デジタルでも前の録画の
 消し残りが透けて出てくるって……あるのかしら？ 画像の崩れた
 ノイズの中に、

の姿のような物が歩いているように見える。

左へ、繰り返し、画像が崩れて四角いブロックになってしまっている。はつきりしないが、なんだか白い着物を着た人に見える。何度も何度も延々と右から左へ繰り返し歩いていく。イケメン韓流俳優の笑顔のアップをガサガサと崩して、右から左へ、ノイズを広げながら、歩いていく。

ブツブツブツ、
・
・
ブツ、
ブツブツブツ
・
・

ブツブツブツ、
ブツブツブツ、

右から左へ延々繰り返す歩く人影と、ブツブツいう音と。

今、何か言葉に聞こえた。日常的に馴染みはないけれど、日本人なら知っている、……お経に出てくる言葉みたいだ。

-
-
-
-
-
-
-
-
-

ブツブツいつていたノイズが連続して、主張が強くなり、節がついて、歌うように、……お経を読んでいる。

もうドラマも韓流スターもあったものじゃない、佐緒里はリモコ

ンに手を伸ばし、再生を止めようとした。すると、右から左に歩いていた白い人影が、立ち止まり、佐緒里が息を飲んで見守っていると、こちらを向いたようで、こちらに向かって歩いてきた。四角いノイズのブロックが大きくなっていき・

佐緒里はリモコンでテレビの電源を切った。ブツンと画面が黒くなる。

「絶対買い換えね……………」

黒くなった画面には白い壁を背に椅子に腰かけた自分の影が映っている。食卓兼のテーブル席で背後は廊下と隔てる壁だ。テレビは頑丈な食器入れの上に置かれ、お隣五〇三号室と隔てる壁を背にしている。テレビに向かって右はベランダのガラス戸で、左はお風呂場の壁だ。

佐緒里は思考が止まったようにぼうつとテレビの黒い画面を見ていたが、ふと、そこに映る自分の背後に、人が立っているのに気づいた。髪の毛の長い、白いワンピースを着た、陰気そうな女だ。佐緒里は目を見張り、反射的に背後を振り返り、今さら「きゃっ」と悲鳴を上げてとっさにぎゅっと目をつむった。胸をドキドキさせて恐る恐る目を開き、背後には誰もいなかった。

はあっ、と息をつき。

「やあねえ、寝惚けているのかしら？」

退屈な主婦の日常に気のゆるみきっている自分に呆れた。しかし

……

姿は見えないけれど、じいっと誰かに見られているような、嫌な感じがずつつと付きまとっていた。

三　ボール遊び

二時十五分、娘里香を幼稚園に迎えに行く。

マンションには二人同じ幼稚園に通う子がいる。一人は年中組の女の子リンコちゃん、一人は里香と同じ年少組のハルキくん。マンションの入り口で二人のお母さんが待っていてくれて佐緒里は二人に挨拶し、いっしょにおしゃべりしながら幼稚園に向かった。里香は初めて通う幼稚園に、心配したが、お友だちもたくさん出来たようで興奮気味に元気にしている。佐緒里は、リカちゃんは可愛いからすぐにモテモテね、と親馬鹿になってニツコリする。

三組の母子でマンションに帰ってきて、おやつを食べてお昼寝すると、子どもたちは約束していて駐車場でボール遊びを始めた。昼間は駐車している車の数も減って、車の出入りもあまりなく、知らないところで遊んでいるよりずっと安全だが、子どもたちだけで遊び口から「この辺りで遊んでいるのよ？」と子どもたちがボール遊びしているのを眺めながらおしゃべりを開始した。佐緒里もだいたい同年代の母親たち相手に気楽にマンションやこの辺りのことを聴けて、おしゃべりは楽しい。子どもたちのボール遊びは他愛ないもので、ぼんぼんバウンドさせてパスしたり、ドリブルして自分の「技」を自慢したり、失敗して転がしてしまつたのを歓声を上げて追いかけたり、道路に飛び出さないようにだけ気を付けて見ていればいい。

佐緒里は午前中の出来事が気になって二人に探りを入れてみた。

「あのね、大家さんには口止めされているんだけど、うちのお家賃ずいぶんお安いんですよお？ あんまりお安いんでね、ひよつとして、何かあるんじゃないかなあー……なんて……？」

二人はきょとんとして、笑い声を上げた。

「菊池さん東京から越してらしたのよねえ？　いいわねえ、都会

の生活」

「いいええー、中心の方じゃないですから、ここと変わりませんよ？」

「そうお？ でもいいわよねー、電車で新宿とか銀座とかお買い物に行くんでしょう？ 美味しいお店もいっぱいあって？ やっぱり憧れるわよねえー？」

「うちなんかユニクロの常連ですよ？ 娘の将来の教育資金も貯めないといけないし、華やかな都心なんて、目の毒ですよ？」

「あら本当？ わたしなんか思いつきり誘惑されて遊び歩いちゃいそうだけど。おほほほほ。でもそうねえ、子どもの教育費はね、考えちゃうわよねえー？」

「あのー……、それで、わたしたちの部屋なんですけどー……」

「ああー。うふふふふ、実はうちのお家賃もないしよなのよおー」

おほほほほ、と二人の先輩主婦は声を合わせて笑った。

「あの大家みんなにおんなじこと言ってるのよー。こんなぼろマンション、安くなくちゃ誰も入らないわよお？」

「そうなんですか？」

このマンションは紹介した不動産屋の所有ではなく、入居を決めるところで大家さんに紹介されて正式の契約をした。大家さんは駐車場のすぐ裏に住む六十代ほどの人だ。自分たちの入居をとて喜んでいたが……

「そうそう、だからね、そのうちお家賃上げる催促なんてあるかもしれないけど、きちんと断らなくちゃ駄目よ？ でないとわたしたちまでみんな賃上げされちゃうから。ここは入居者同士団結して、断固阻止！ ね？」

「ええ……。ここ、他の部屋もみんな入居しているんですよね？ 皆さん長くお住まいだとか？」

「そうね。古いとかぼろいとか、文句を言いながらも誰も出ていかないわよねえ？ 立地はいいし、なんだかんだでけっこう住み心地いいのよね？」

二人はまた声を揃えて笑った。

「皆さんのお部屋もリフォームされてるんですか？」

「うちはしてないわよ」

「うちも。だつて、ねえー？」

「そうよね、リフォームするとなったらその間他に移らなくちゃならないし、リフォームしてきれいになつたら、家賃上げる口実になつちゃうじゃない？」

「ああ、なるほど」

佐緒里はがめつい住人相手の大家が気の毒になつて苦笑いした。すると入居前にリフォームが済んでいた自分たちはやっぱりラッキ―だったのだろう。

「ああ、そうそう！」

リンコちゃんのお母さんがパチンと手を打つて言った。

「一つ忠告。カビには気を付けること」

「カビですか？」

「そうそう。こっちはただでさえ気候がじめじめしてるのに、古いでしょう？ コンクリートに湿り気が染み込んでるのよおー。だから換気は常にするようにして、ちょっとでもカビが生えてるのを見つけたらすぐに掃除して始末すること！ 放っておくと、・・オバケより怖いことになっちゃうわよー？」

脅されて佐緒里はお愛想に苦笑した。カビか……、確かにそれは、やつかいそうだね。

リンコちゃん、ハルキくんとボール遊びしている里香は。

ハルキくんがパスしてくれたボールが、里香がニコニコしてキャッチしようとする、急に横へカーブして、その動きはまるで誰かに横から叩き落とされたようで、ポンポンとバウンドしたボールは、勢いがなくなつて転がっていくかと思いきや、ポンポンと同じ勢いでバウンドを続け、それはまるで、見えない誰かがドリブルしているみたいで、それは自分たちとだいたい同じくらいの背丈の子ども

のようで、バウンドを続けるボールは、ぐるーっと円を描くと、また急に前に向かってバウンドし、里香の手にパスされた。ピンク色のゴムまりだ。里香はじつとボールを掴んだまま、ハルキくんを見た。ハルキくんは鼻が詰まったみたいに口を開けてぼうつとした顔をしている。リンコちゃんは、お姉さんらしくニコニコ笑っている。「ねえ、今ボール、変だったよ?」

「別に。変じゃないわよ?」

里香は首をかしげ、リンコちゃんにパスした。受け取ったリンコちゃんは、ポンポンとドリブルして、ハルキくんが取りやすいようにバウンドさせてパスした。下手くそなハルキくんは足にぶつけて向こうの方に転がしてしまい、追いかけて捕まえると、リンコちゃんの真似をしてドリブルしながら戻ってきたが、また足で蹴っばつて転がしてしまった。里香は自分の方が近いと思ってハルキくんと競争してボールを追いかけた。すると二人が追いつく前にボールは誰かに蹴られたみたいに二人の間を転がって戻っていった。ちょうどリンコちゃんの所に転がっていった、リンコちゃんは拾い上げると二人が戻ってくるのを待った。里香はハルキくんに訊いた。

「ねえ?今またボールが勝手に動いたよ?」

ハルキくんは頭の回転の悪そうなぼうつとした顔で、

「おりこうさんなんだよ」

と言った。里香は走って戻ると、ボールを上に向けてキャッチして遊んでいるリンコちゃんに、

「そのボール、変だよ?」

と言った。

「変じゃないよ」

リンコちゃんはボールを放り上げながら言った。

「変だよ、勝手に動くんだもん!」

「このボールは中にもう一つ小さなボールが入っていて、『バランス』で自分で動くんだよ?」

「ふうーん、そうなんだ?」

里香はそうなのかな？と思って感心した。

「じゃ続きしよ？」

「うん！」

三人でまた遊びだしたが、リンコちゃんがハルキくんに投げたボールがカーブして里香の所にやってきて、里香がハルキくんに投げてやって、ハルキくんがリンコちゃんに投げると、またカーブして里香の所にやってきた。里香がリンコちゃんに投げると、ボールはリンコちゃんに届く前にバウンドして、里香の所に戻ってきて、スポツと里香の両手に収まった。

「よかったね、リカちゃん、ボールに気に入られたみたい」

里香はポイ、とボールを投げ捨てた。

「気持ち悪い……………」

リンコちゃんは歩いてボールを拾い上げ、お姉さんぽく笑って里香に言った。

「リカちゃん、けがしたくないでしょ？」

「けが？……」

「そうよ？　じゃあボールといっしょに仲良く遊ばなくちゃ駄目だよ？　ママにも言っちゃ駄目だからね？　ボールが怒るからね？」

「う、うん……………」

「はい」

リンコちゃんは里香にボールを投げた。受け取ると、自分たちの手のぬくもりだろうが、ボールが生暖かく感じられた。リンコちゃんの言う中に入っている小さいボールだろうか、ピンク色のゴムまりの一部が真っ赤で、なんだか、赤い目玉みたいに見えた。里香は泣きそうになって、そつとハルキくんに投げた。ボールはハルキくんに届くことなく、里香の足下に戻ってきた。ハルキくんは頭の悪そうな顔で

「リカちゃんいいなー」

とうらやましがった。

「拾って？」

リンコちゃんに言われて、里香はそつとボールを持ち上げた。

佐緒里は母親たちといっしょに子どもたちがボール遊びしているのを眺めていた。

ふと、エレベーターの表示が下に向かって動いているのに気づいた。2F…1F。

「ガゲン。」

古い物なので大きな音がしてドアが開く。佐緒里といっしょに他の二人の母親もエレベーターを見ていた。なかなか乗っていた人が下りてこない。上でいったん乗ってボタンを押したものの忘れ物にでも気づいて下りてしまって、箱だけが下りてきたのだろうか？ そんな風に思っていると、ふらりと、濃い紺色のシルクのブラウスを着た若い、派手な髪型の女が出てきた。

「こんにちは」

挨拶されてこちらも軽く挨拶を返した。すっかり化粧をしているが覇気がなく不健康そうで、陰気な感じだ。

佐緒里には彼女の付けている香水が気になった。

ステップを下りていく後ろ姿を見送って、リンコちゃんのお母さんが、

「これからご出勤。夜のお店のお仕事なのよお」

と、含み笑いを漏らしながら教えた。

「ああ…」

ブランド品のバッグを持っていたからクラブのホステスだろう。あんな陰気な顔でお客がつくのだろうか？ ま、その手の店に通う男も好きずきだろうが。

特にトラブルがなければ夫の帰宅はだいたい五時四〇分頃のようにだ。

帰宅すると里香といっしょにお風呂に入る。二人がお風呂に入っ

ている間に佐緒里は夕飯の支度をする。

お風呂からパパと娘の会話が聞こえる。

「きのうパパ、お風呂でひっくり返っちゃって、起きてきたママに怒られちゃったんだぞー？」

キヤハハハハハハ、と娘の笑い声が弾ける。

「幼稚園はどうだ？ 楽しいか？ お友だちいっぱいできたか？」

「うんっ！」

「そうかそうか。お友だちと仲良く楽しく遊ぶんだぞお？」

「うんっ！」

佐緒里は微笑ましく思い、おかずを運んで食卓に並べていく。テレビの画面に目が行き、じっと動きが止まってしまふ。昔のブラウン管テレビほどではないが暗く覗き込む自分の姿が映っている。

キッチンに戻りしな、ふと、壁が気になって振り返った。居間の裏側の壁で、ちょうど自分がテレビを見ながら背にしていた辺りだ。なんとなく気になって近づいて見ると、白い壁紙にブツブツした黒い汚れが付着している。

「え？ やだ、かび？」

指でひつかこうとして、やめた。

「どうしてこんなところに？」

廊下の仕切の壁は木製だ。キッチン側とベランダ側に入出口があつて、アコーデオンカーテンがドア代わりになっている。寝室と書斎は柱だけで引き戸が壁代わりになっている。

かび、だ。

出るのはキッチンや風呂場の水回りとはかり思っていたが、なんでこんな何もないところにかびがわいてくるのだらう？

古くてコンクリートに湿気が染み込んでいるという話を思い出し、天井を見た。水漏れみたいにして湿気が伝い落ちているのかも知れない。そう思うとゴゴゴゴ、とトイレの水を流す音が聞こえてきた。佐緒里はため息をついた。前のマンションでもそうだったが、横の壁は厚くて防音効果も高いが、床は案外薄く、上の階の音がけ

っこうダイレクトに聞こえてくるのだ。

「ま、仕方ないわね」

と、流れていく音を恨めしく睨み、さっそくカビ用洗剤を買ってこなくちゃねと思った。

四、一人留守番

夫にハードディスクの録画を見てもらった。ドラマの停止した所から再生するとノイズが出て画面全体がガタガタになり止まってしまった。やはり故障のようだ。

「あちゃー、駄目だな。こりゃ買い換えだ。去年買ったばかりだよなあ？ ま、しょうがないか、こういうのは当たりはずれがあるからな。日曜日に買いに行くか？」

「えー。わたし夜中見たいドラマがあるんだけどなあ？」

「なんだよ、今夜もあるのか？」

「月曜から金曜、毎日あるの」

「相変わらず韓流ドラマか？ そんなに面白いか？ あんなベタなのが？」

「そこがいいのよっ！」

「ああ、ああ、分かった分かった。すぐそこにY's電気があるなあ。散歩がてら見てくるか」

「じゃパパ、よろしくっー」

「里香も行くっー！」

「えー、ママとお留守番してようよー？」

「やだ、パパと行く！」

「ははあー…、となりにアイスクリーム屋があつたもんなあー？」

「駄目よお、夜冷たい甘い物食べちゃー？」

「ま、いいじゃないか、歩けばカロリーも消費されるさ」

「車で行けば？」

「ガソリンがもつたいたい。それにここの駐車場、車出しづらいんだよなー。表通りもまだ混んでるじゃないかな？」

「そう？ 里香ちゃん、パパと行くの？」

「うん！」

「アイスはシングルよ？」

「うん！」

「そつか。ママ一人お留守番か」

「いっしょに来ればいいだろう？」

「嫌よ。夕飯の支度で疲れちゃった」

「おいおい、だらけて太るなよ？」

「平気よ、主婦は忙しいんだから」

「そうなのかあ……？」

「さあて夕飯の後片づけしなくちゃ。片づけが終わったらわたしもお風呂入っちゃうから」

「うんかまわないよ、鍵持ってくから。一人の時は戸締まりしつかりな？美人の奥さん」

「ハイハイ。行ってらっしゃーい」

「バイバーイ」

里香はかわいく手を振り、夫と二人出ていった。佐緒里はガチャリとドアの鍵を掛けた。

食器を洗い終わると風呂に入ろうと思い、思い出して戸締まりを確認した。玄関のドアと、ベランダの戸と、書斎の窓だ。洗面所で衣服を脱ぎ、風呂場に入る。ここにも通気のための小窓があるが、上が小さく開くタイプで、まさかここから侵入してこられる人間もないだろう。

体を流して湯船に浸かる。ハア……と心地つき、なんだか本当にひどく疲れている気がする。一生懸命働いている夫には申し訳ないがそれほど疲れることをした覚えもなく、まだ不慣れな環境による気疲れだろうと思う。

「でもま、のんびりした所だし、マンションにいいお友だちもできたし、よかったわよね」

自分に言い聞かせて満足し、手を組んで伸びをすると、肩をリラックスさせた。

「ハア……」

温泉にでも来たように深く息を吐き出し、あごまで湯に浸った。ほどほどにぬるんだお湯に凝った力みが溶けだしていくようだ。

ぼつとクリーム色の壁を眺める。うんと脚を伸ばせるような湯船でもなく狭い風呂場だが、まだ新しいユニットバスで清潔だ。

廊下の壁のカビを思い出した。本当になんであんな所にわいちゃったのかしら？

電灯は暖色系で、夕日を思わせる。じいっと狭い室内にいると時刻の感覚が狂ってくる。

なんとなくじいっと見ていたら目が疲れたのか変に白々して、暗くなったような気がした。

換気扇の音が妙に耳につく。

佐緒里はそろそろ湯船から上がろうとして、ひどくだるい感じを覚えた。ひくりと眉間にしわが寄った。気のせいどころか、本当にだるくて、体を立ち上がらせようという気力が全く湧かない。ゴクリと生唾を飲み込み、ひどく不安を感じた。ひどく気が焦るのに、体が全く言うことを聞いてくれない。ぷつぷり糸が切れてしまったみたいに自分の手足が思うようにならない。

どうしてしまったの、わたし？……

ひくりひくりと眉間にしわを深くし、必死に体を動かそうとし、言うことを聞かない体を見下ろすと、いつの間にか湯がひどく濁っていた。

なんなの、これ？

薄茶色の濁りが、だんだん濃くなってくる。自分の体が腰の辺りまで濁りで見えなくなってきた。乳房まで濁りに隠されていく。風呂釜が汚れていて溜まった汚れが表に吐き出されてきたのだろうか？ 見えなくなっていく自分の体と乳房に、まとわりつく茶色っぽい水にひどく不快を感じた。色はどんどん濃くなっていく。そして、湯に拡散していた色がはつきりし出すと、それは、茶色ではなく、赤かった。クリーム色のプラスチックの浴槽に赤い湯が張り、自分の白い肌を浸している。佐緒里はおぞけ立ち、脱出しようと死に物

狂いになった。

腹が重い。今や真っ赤に染まった湯の内部で、何かが佐緒里の腹を押さえつけていた。何かが重く腹に乗っていた。佐緒里は自分の頭がどうにかなってしまいそうな恐怖と戦わねばならなかった。体は相変わらず泥のようにぐったりして動いてくれない。

湯に男の腕が差し込まれていた。太い腕が真っ赤なお湯の中に突っ込まれていて、いったいいつの間にと思っ間もなく、佐緒里のすぐ横に知らない中年男の顔があった。浴槽の縁に二の腕をまたがせ寄りかかった男が、ぎょろりと目を剥いて佐緒里を見ていた。佐緒里は目を見開いてブルブルと小刻みに震えた。男のぎょろりとした目は、佐緒里の方を向きながら、焦点が突き抜け、まるで死人のようだった。

佐緒里はブルブル震えながら、男の顔から、湯船に差し込まれた男の腕に視線を動かした。

ゆらりゆらりと見えない真っ赤な中で漂うようにしていた男の腕が、佐緒里の乳房に触った。

佐緒里はおぞけ立ち、暴れ回った。それは湯をゆらゆら揺らめかせるわずかな物だったが、足が栓の鎖に触れ、指を引っかけ、引っ張った。グル、グルグルグル・・・と音を立てて湯が流れ始めた。

男の姿が消えていた。それでも佐緒里は恐ろしそうに男の顔のあった空間を見つめ、男の腕が差し込まれていた湯船を見た。赤い水位が下がっていき、自分の乳房が現れ、体と腕が現れ、曲げた膝頭が現れ、太ももが現れてきた。

グルルルルル・・・、

と、狭い中に水が勢いよく吸い込まれていく音を聞いて、佐緒里は空の浴槽の中に呆然としている自分に気づいた。

浴室は暖色に明るかったが、やはり薄暗い白々しさを感じた。

姿勢を変えると濡れたプラスチックに肌がこすれる音がやけに耳に響いた。換気扇は変わりなく静かな音を立てて回っている。

佐緒里はのろのろ立ち上がって洗い場に出ると、シャワーで体を

流し、ボディーソープを塗りたくってごしごし体を洗った。

恐ろしそうな目で浴槽を見ると、クリーム色のプラスチックの壁に真っ赤な液体が溜まっていた跡はなく、全てが自分の幻であったようだ。しかし佐緒里はその空っぽの浴槽に、どっぷり赤い色に浸かっている、まるで死んでいるようにぐったりした自分の姿が見えるような気がした。

佐緒里は、シャワーを激しく流しながら、じいっと、暗い目で、浴槽を見つめていた。

ガチャンとドアの金属音が響き、

「ただいまー！」

元気な声を出して娘と夫が帰ってきた。

「ただいまー。ほら、買ってきてやったぞ、新しいハードディスク」
夫が四角い箱の入った電気店のビニール袋を掲げて見せ、

「お帰りなさい。ありがとうございます」

佐緒里はニツコリ笑顔を見せた。

「あゝ、汗かいた。やっぱりこっちは蒸し暑いな。もう一回さつと風呂入らせてくれ。上がったらテレビにつなげてやるからさ？」
「はい。どうぞ」

佐緒里はビニール袋を受け取ると上機嫌に微笑んで許可してやった。夫はさっそくべたべたするのを気持ち悪がってパタパタやっていたシャツを脱ぎながら洗面所に入っていく、

「失礼」

上半身裸でニツと笑って引き戸を閉めた。しばらくして風呂場の折りたたみ式ドアが開く音がして、夫の声がした。

「あれ？ もうお湯抜いちゃったの？」

佐緒里は少し声を張り上げて答えた。

「もう入らないと思ったから。狭いお風呂だもの、夏場は三人入ったらもう駄目よ」

「そうか？ まだ夏本番には早いかなあ？」

佐緒里は夫が一回一回風呂のお湯を使い捨てにするのをもったいながっているのを知っているが、無視した。声があきらめたように言う。

「ま、いいや。じゃあシャワーしちゃうよー？」

「どうぞー」

パタンとドアが閉まり、シャワーの音が聞こえてきた。

音に耳をすませ、佐緒里はなんだかもじもじしている娘を見ると、ニツと歯を見せた。

「何味食べたの？」

「チョコミントクッキー」

「美味しかった？」

「うん！」

「よかったわねー？ それじゃあ、しっかり歯磨きしなくちゃね。

歯ブラシ持ってきて、台所でしなさい。ママがしっかり見張ってますからね？」

「はあーい」

里香はガラガラと洗面所の戸を開けた。

風呂のドアの前に向こうを向いて髪の毛の長い、白いワンピースを着た女が立っていた。

里香は女に気づかないようで、手を伸ばして自分の歯ブラシと専用のイチゴ味の歯磨き粉を掴んだ。

佐緒里は娘が歯ブラシを濡らし歯磨き粉を付けるのをじっと見ていた。

里香は歯ブラシをくわえてこっちに戻ってくると、ガラガラ引き戸を閉めた。

流しに向かって歯磨きする娘の後ろに立って佐緒里は言った。

「よく磨くのよ？」

背後にはまだシャワーの音が続いていた。

五 だるい

朝。

昨日のアイスのせいか里香のおトイレが上手く行かず、幼稚園に遅刻して送っていった。

帰り道、マンションの前の通りに戻つてくると、ぷんと香りが漂つてきて、夜の店で働いているという女といっしょになった。

後ろから歩いてくる彼女を振り返ると、向こうの方から

「おはようございます」

と挨拶してきた。佐緒里は挨拶を返しながら内心目を見開く思いだった。昨日の夕方会ったときにはひどく不健康で陰気に見えたが、今見る彼女は肌の張り色つやがよく、健康的で、魅力的だ。歳は案外自分と同じくらいかしら？と優越感を持つていたが、自分より五歳は若そうだ。胸も大きい。夜の間働いて、朝方なんてぼろぼろになっていそうなものを、特に化粧が濃いわけでもないのに、綺麗だ。「お綺麗ね？」

佐緒里はつい嫉妬混じりに言ったが、

「嫌味ですか？」

女は首をひねってかわいらしく上目遣いで佐緒里を睨み、くったくなく笑った。佐緒里は馬鹿にされているようで不快に思ったが、女の方はごくフレンドリーに、

「わたし寝起きが駄目なんです。だんだんテンションが上がってきて、普通の人の時間帯とすっかり逆ですね？ あら、逆の逆で、合ってるのかしら？」

とあっけらかんと笑った。飾りのない自然な表情で、声も話し方も落ち着いて品があり、働いている店が高級なものであるのを窺わせた。ますます腹が立つ。

ひどく嫉妬する。

女の香水。時間が経って残り香程度で、髪にまわりついたタバ

この煙が臭い。多少くたびれた女自身のにおいが鼻につく。どうせ嫌らしい女と思う。

「たくさん稼いでいるんでしょう？　こんな所じゃなくもつときれいな高級マンションに越したら？」

女は自然な仕草で肩をすくめた。

「悪い男に引つかかつちやいまして、お給料はほとんど借金返済に消えちゃいます。通勤だってバスなんですよ？」

それはさぞかし男たちの視線を引くでしょうよ、朝から目の毒ねと思う。

「まあ、そうなの？　お気の毒さま」

いい気味だと少し機嫌がよくなる。女は自嘲する。

「ええ。奥さんみたいな人が羨ましいわ」

「そうかしら？」

優越感。

二人は並んで歩きながら、入り口のステップを上がって、エレベーターの前に立つ。女がボタンを押すと箱は一階にあつて扉がすぐに開いた。女は先にスイと入って、「開」のボタンを押したまま佐緒里の乗ってくるのを待っている。佐緒里が乗って、まだ乗ってくる人がいないか確かめているのか女はずいぶんゆつくり時間を取ってボタンを放した。これもそういうお店に勤める女のたしなみなのかしらと思つたとたん扉はゴトンと音を立てて閉まつた。女は佐緒里が何も言わないうちに「5」を押し、「6」を押した。佐緒里は「うちの部屋をご存じでした？」

と訊いた。女は

「五〇五号室ですよ？　わたし、六〇五号室なんです」

と答え、

「あ、わたし、よもとなお四元奈緒と言います。よろしく願ひします」と綺麗な笑顔で名乗った。

「ああ、わたし、菊池です。わたし、菊池佐緒里。主人と娘と、五〇五号室に越してきました。よろしく願ひします」

遅ればせの挨拶をしながら、

「じゃあ、うちの上の部屋にお住まい？ あのうち、うちの音、うるさくありません？」

と遠慮がちに訊いた。エレベーターが五階に着き、ポーンとチャイムが鳴ってドアが開いた。

「可愛らしいお嬢さんですね？」

笑顔で言われて、聞こえているんだ、と思った。

「大丈夫ですよ、下の音はほとんど聞こえません。それより、わたしの部屋の音、響きますでしょう？」

「えー……」

「お洗濯とか、お風呂とか？」

「ああ。水の音はしょうがないわよね？」

「すみません。響いちゃうんですね？ ごめんなさい」

恥ずかしそうに頭を下げる女、四元奈緒に、

『トイレも響くわよ』

と思った。

「いえいえ。お互い様。それじゃあ」

佐緒里は爽やかな笑顔を作ってエレベーターを下りた。あら？この人、夜は留守なのよねえ？ じゃあ聞こえてきたトイレの音は別の部屋だったのかしら？と思った。

振り返ると、奈緒はボタンを押したままじいつとしていた。佐緒里はまだ何か言いたいことでもあるのかしら？と顔を見つめると、奈緒は不自然なほど真っ白な歯を見せて笑い、ボタンから手を放すと『さよなら』と振った。ドアが閉まり奈緒の笑顔を隠す。上昇するエレベーターを見送り、

「嫌な女」

と佐緒里はつぶやいた。

昼を食べると、佐緒里は椅子からずり落ちそうなほどぐったりし、

はつと、眠ってしまったかしら？と時計を見たが、時間は進んでおらず、ほつとして、けたたましい笑い声を上げているお昼のバラエティー番組を眺めた。しばらく見ていたが、

「つまらないわね」

生あくびを噛み殺し、なんだかひどく疲れた口臭がしているようで気になった。どうしたのかしら？とこめかみをさする。どうにも体がだるくて堪らない。だるさにぐったりして、気がつくともた居眠りしていたのではないかとほつとする。しばらく横になった方がいいかと思っただ、このだるさは、一度眠ったら二三時間はとても起きあがれそうにないと思っただ。眠気を誘うつまらない番組を睨み、「あつ、そうだ、きのうのドラマ」

深夜、夫に買ってきてもらったハードディスクに録画した韓流ドラマ。月から金の帯で集中放送していて、一回分途中から見逃してしまったがまだ補修は効く。幼稚園のお迎えまであと一時間少々、一時間のドラマを見ていればちょうどいい。

佐緒里はさっそくリモコンでハードディスクの録画済みリストを呼び出した。

「録れてる録れてる。ではさつそく」

タイトルが出て、前回のダイジェストが流れる。

「あー、そうなっちゃったわけ？ エグい展開」

夫の言うように「ベタ」な展開に苦笑しつつ、オープニングの間に濃ゆーい緑茶でも入れようと思っただ。

二〇分ほど後、佐緒里は椅子の背もたれにぐったり寄りかかり、手足をだらしなく投げ出し、半分閉じかかった目でぼうつとテレビを眺めていた。

テレビには昔の白黒映画みたいな物が流れ、韓流ドラマには出てきそうもない日本のお経を読む声が、延々と、流れていた。

夕方。

帰宅した夫が娘とお風呂に入り、佐緒里はキッチンで夕飯の支度をしていた。

背後から二人の声が聞こえる。

「今日朝、幼稚園に遅刻しちゃった」

「どうしてだ？」

「おトイレがなかなか出なかったの」

「あー、昨日の夜のアイスクリームのせいだ」

「ママにも言われたあー」

「ハハハ、そうだろうなあ」

「でもねでもね、ママもお帰りのお迎えに遅刻して先生に怒られたんだよ？」

「おやおや、ママまでか？」

「お昼寝しててお寝坊しちゃったんだってー」

「アハハハハハ、駄目なママだなあ？」

「駄目なママですねえー？」

キヤハハハハハ、と娘の笑い声が響く。佐緒里は、上に聞こえているのよ、

と思う。いや、四元奈緒はもうご出勤か。

佐緒里はまな板でゴボウを笹がきにし、今ニンジンを千切りにしている。トントントン、とリズムカルに包丁を動かしながら、その作業にひどくイライラした。

遅刻して先生に叱られた？ 昼寝して寝坊した？ 主婦が暇こいてのんびり大いびきでもかいていたと思ってるんでしょう？ 昼寝だなんて、心配させないように言ったに決まってるでしょうが！

トントントン、と切りながら、ニンジンが妙に赤いのに気づいた。
「あ、……………痛い……………」

いつの間にか指を切ってしまっていたようだ。ニンジンのプロッ

クを押さえていた左手を持ち上げると、人差し指の腹に滴がたまつて、ボタツと、まな板に滴った。丸く広がり、まな板の水分に輪郭がジグザグになってぼやけていく。ボタツ、ボタツ、赤い玉がしたたり落ち、広がり、重なっていく。じつと見下ろした佐緒里は、二ンジンのブロックをダンツダンツダンツ、と適当に叩き切ると、油を敷いて温めていたフライパンにまな板を傾け、みんなひとまとめに入れてしまった。ジュワアーッと油が激しく跳ね、佐緒里はまな板に張り付いていた残りを包丁で掃いて落とした。赤い色が撫でられ伸びている。ジュージュー激しく跳ねていた油はじきに収まり、佐緒里はベテラン主婦らしく菜箸で掻き回し始めた。

「美味しい？」

佐緒里に訊かれて夫も娘も

「美味しい」

と答えた。風呂から上がって指の絆創膏を見てからかったのを佐緒里にひどく怒られたのだ。

「ママは料理が上手だねえ？」

「ねえー？」

夫と娘で調子よく揃ってママのご機嫌を取る。ママもニッコリ笑ってやる。

「よおく味わって食べてね？」

夫と娘が、少し二ンジンの焦げたきんぴらゴボウをもぐもぐ美味しそうに食べるのを、佐緒里はうつとりしたような目つきで眺めていた。

六、けが

午後、里香がけがをした。

駐車場でリンコちゃんハルキくとボール遊びしていて、強くボールを投げられ、転んだ拍子にコンクリートの角で手首を切ってしまったのだ。左手だ。最初にじんでいた程度の血が、だんだん盛り上がり流れ落ちるまでになった。佐緒里はびっくりして119番に掛けようとしたが、

「病院は混んでてなかなか診てもらえないかも知れないわよ？ 近くに個人の外科医院があるから、そこならすぐに診てもらえるわよ？」

とリンコちゃんママが言うので、案内してもらうことにした。自動車はない。近所と言うがどの程度の所なのか？

ハルキくんのママが自転車を出してくれた。後ろにハルキくんを乗せて走るための子供用椅子が取り付けられている。そこに里香を乗せて、慣れたハルキくんのママがハンドルとサドルを掴んで引いていき、佐緒里も椅子の背もたれを掴み里香に寄り添い話し掛けながら歩いた。リンコちゃんママが先を歩いて前を確かめ案内してくれる。リンコちゃんハルキくんも自転車の後について歩いてくる。

自転車を中心にそろそろ歩く一行は、通りに出ず、駐車場の奥に向かった。隣の会社のオフィスの脇を生活排水を流すドブがあり、脇に向こうの通りへ出る狭い道がある。

「お買い物に行くときの抜け道。便利でしょう？」

リンコちゃんママはそう言うが、緑色の汚れが浮いて臭いのするそこを佐緒里はあまり通りたいと思わなかった。

通りを信号を待つて横断すると、すぐに外科医院はあった。

リンコちゃんママが顔なじみらしい受付の看護婦に事情を説明すると、看護婦は里香のけがを見て、すぐに先生に報告してくれた。待合室で老人が二人椅子に座っていたが、すぐに診察室へ呼ばれた。

医者はもう八十になっているんじゃないかと思われる頭のはげ上がったお爺ちゃんだった。小柄でしわだらけのお爺ちゃん先生は目を瞬かせながら里香の手首を消毒し、傷の具合を見た。

「ああ、この程度なら大したことないな。しっかり消毒してクリップで止めておけばすぐに塞がるな」

「クリップ、ですか？」

ホツチキスみたいな道具でバチンと止められるのを想像して青くなる里香を氣遣って佐緒里が訊いた。先生は重いまぶたを下に引く張るような顔で佐緒里を覗き、怖がる子どもに笑いかけた。

「バンソウコウと同じだよ。ちよつとチクンとするけど、注射みたいに痛くはないから、そのくらい平気だよな？」

里香は青い顔でコクンとうなずいた。先生は褒めるように笑い、佐緒里に、

「擦り傷としてはちよつと深いから縫った方が確実ですが…、こっちの方が傷もきれいに治りますし、女の子ですから、その方がよいでしょう？」

と説明した。佐緒里はうなずき、娘の頭を安心させるように撫でながら

「お願いします」

と言った。

先生は看護婦の用意した茶色い消毒液で改めて傷口を消毒し、サイズの合ったクリップ細い短い針の付いた絆創膏を、眉を寄せて慎重に位置を測り、止めた。里香はビクビクしていて、絆創膏を当てられた瞬間チクリとしたようでビクリと肩を震わせたが、大した痛さではなかったらしく、止められてしまつと佐緒里を見上げて平気だと言つように笑った。佐緒里は娘の頭を撫でてやりながら医者の方をじつと観察していた。医者は血が流れ出ないのを確認し、後のガーゼを当てて包帯を巻くのはベテランらしい看護婦に任せた。自分より彼女の方が上手だと言わんばかりにニツコリ笑つて子どもを見た。

「はい、おしまい」

看護婦が包帯を巻き終えると、里香は硬く曲がらない手首の違和感に母親を見上げた。

「どのくらいで治るでしょう？」

「そうですね、子どもは治るのが早いから、三、四日もすれば傷は塞がるでしょう。念のため一週間くらい止めたままにして、えー、では三日後に見せに来てください。様子を見て包帯を取り替えましょう。今日明日お風呂は我慢して、激しい運動も避けるように。お嬢ちゃん」

里香を笑顔で見て。

「一週間だけ元気に遊ぶのは我慢だよ？ その間お姫様みたいに大人しくしているんだよ？ いいね？」

里香はうなずき、ニツコリ笑った。

「お医者先生、ありがとうございました」

「どういたしまして。いい子だねえ」

医者は看護婦にうなずき、看護婦は

「では待合室でお待ちください」

と患者と母親と、後ろで見ていたリンコちゃんママを送り出した。

待合室で薬の処方と支払いを持っていると、リンコちゃんママとハルキくんママが相談して佐緒里に申し出た。

「リカちゃんにけがさせてごめんなさいね。治療費はわたしたちで持たせていただきます」

「いえ、そんな。子どもたちの遊びの上の事故ですから、そんなお気遣いなく」

佐緒里は辞退したが、

「いえいえ、こちらからのご挨拶代わりに、ね？」

と押し切られ、支払いを受け持つてもらうことになった。

里香は包帯を物珍しそうに覗き込むリンコちゃんとハルキくんに自慢するように見せびらかしている。リンコちゃんとハルキくんの

ママたちはニコニコ里香を見て、

「リカちゃん、ごめんなさいねえ。でも、これからもうちの子たちと仲良く遊んでね？　ね？」

とお願ひした。里香は元気に

「うん！　いいよ！」

と二人に笑いかけた。子どもたち二人もニコニコ里香に笑いかけた。佐緒里は、

里香にボールをぶつけたのはどっちの子だったかしら？
と思った。

その日夫は帰りが遅く、帰ってきたのは深夜〇時を回ってからだった。

佐緒里は起きて待っていた。

「メールしたでしょ？」

と眠気を我慢していたきつい目つきで見つめて言う。夫は興ざめしたような顔でのんびり

「大したことなかったんだろう？　病院にも行かないで済んだんだろ？」

と返した。

「そうだけど……」

夫の無神経に腹が立つ。

「どこで飲んできたの？」

鼻がつんとするほど酒臭い。

「工場長に誘われてな。断るわけにはいかないだろう？　将来上司になるかも知れないんだから？」

「わたし嫌よ、こんな田舎」

「いなかじゃないだろう？　俺は君と違って元々地方の田舎出だからな、居心地いいよ」

「嫌だわ」

佐緒里も自分の本心は分からないが今はとにかく、こんな田舎、嫌で、腹が立って、ならなかった。妻の刺々しい不機嫌を持て余して夫が折れた。

「ああごめん、悪かったよ。本当に断れなかったんだ、勘弁してくれよ？ ……里香はどうなんだ？ けがして……シヨック受けたりしてんのか？」

「ちよつとね。うつん、最初だけ。今は平気」

「そうか……、よかった。心細い思いさせちゃったな、ごめんよ」

夫に正直にすまなそうな顔をされて、佐緒里もため息をついて意固地になるのをやめた。

「もういいわよ。お仕事の内なんでしょ？ お風呂どうするの？ お湯流してないわよ？」

夫はほつとして嬉しそうな顔で答えた。

「うん、入らせてもらうよ」

佐緒里は手を差し出した。

「背広、どうぞ」

夫はいつもなら脱いで手に持ってくるスーツをご丁寧に着ていた。

「おつ、ありがとう」

スーツを脱ぎ、ネクタイをゆるめて首から抜き、妻に渡した。

「ズボンも。明日クリーニングに出しておくわ」

「うん、頼む」

スラックスを脱ぐ夫をひっくり返らないでよねと眺めていた佐緒里は、あら？と気づいて言った。

「あなた、靴下は？」

夫は裸足だった。

「あれ？ えーと……、どこかで脱いじやったみたい……、ああ、そうそう、料理屋でお座敷に上がったんだ」

「もっ……。いいわね、男の人はお仕事で美味しいお料理が食べられて」

佐緒里は呆れた。夫はスラックスを渡すと床に置いたカバンを持ってすぐ居間に入っていく、自分の椅子に置いて帰ってきた。

「すみません、奥様」

「はいはい。わたしはもう寝ますからね？」

すれ違い、ふと振り返った。夫は洗面所に入っていく、引き戸を閉めた。

ワイシャツの背中から、香水のにおいがした。

「どこのお座敷に上がってきたんだか……」

ふと、カチンと記憶が一致した。知っている香水だった。よく、佐緒里は引き返し、暗い陰険な目でじつと磨りガラスの向こうを見た。

折りたたみ式ドアが開き、白い裸がおふる場に入っていく、ドアが閉められた。

佐緒里は陰険な目でじつと見ながら、その裸の肩が細く華奢だったように思った。黒い髪の毛が背中まで垂れていたようにも。ドアは自分たちがお風呂を上がってしばらくしてから開け放しにしていたはずで、入るのにもう一度開ける必要はないはずだ。

風呂から夫がばしゃばしゃお湯を使っている音が聞こえてくる。

佐緒里は陰険な目つきのまま寝室に入り、布団に横になると、じいつと暗い天井を見つめていた。

風呂場からはばしゃばしゃと、妙にはしゃいだ水の音が聞こえ続けていたが、佐緒里は知らんぷりして、じつと天井を見続けていた。

七、かび

朝。目覚まし時計で夫を起こし、食欲がなさそうにするのを睨み付けて朝食を食べさせて、遅刻しないように早めに仕事に送り出す。マイカーは工場に置きっぱなしで、今朝はバス通勤しなくてはならないのだ。しきりに生あくびするのを、

「ほら！、しゃんとして！」

と背中を叩いて玄関へ追い立てる。

「はいはい、旦那さんは今日も工場へ機械のご機嫌窺いに、だ」
どうもふわふわ怪しい様子に、

「ほんとにしっかりしてよ？ うっかり機械に巻き込まれて、腕を切り落とされたりしないですよ？」

夫はギクリとした顔で振り返り、

「おいおい、恐ろしいことを言うなあ？ そんな危険な機械じゃあ………ないよ………」

と、どうも心許ない。妻の不安げな顔に、

「大丈夫大丈夫、本当に危険はないように設計されてるんだから！」
と、大げさなくらい明るく言って、妻の背後に娘がこつちを見ていないのを確認すると、んー、と行って来ますのキスをねだってきた。妻は顔を反対に背けて嫌がった。

「お酒臭いわよ」

妻に拒否されてしょげた夫は、

「まだそんなに臭うか？ コンビニでガムでも買ってくかなあ………」
と、しょんぼり背中を丸めて靴を履き、ドアを開けた。

「行って来まーす」

妻も突っかけを履いて後から出てきた。

「行ってらっしゃい、あなた」

キスの代わりに両肩をポンと叩いて元気づけてやり、にやけた顔で振り返った夫は

「じゃな」

と手を振って歩いていき、階段を下りる手前でふと横を向き、エレベーターのボタンを押した。上にいたらしいエレベーターはじきにドアが開き、夫は妻を見てもう一度手を振り、乗り込んでいった。妻は手を振り返し、そのまま見ていたが、ドアはなかなか閉まらず、何してるのかしらと見ていると、ようやく閉まり、下降していった。妻は手すりから下を見て、夫が出てくるのを待った。夫が出てきて、こちらには気づかず通りに出て、そこで誰かに会ったように立ち止まり、やがて女が歩いてきた。四元奈緒だ。今日はずいぶん早いお帰りだ。二人は向かい合って親しげに笑顔で何か話し、挨拶すると夫は歩いていった。四元奈緒はそのまま見送り、建物の陰で見えないがどうやら夫が振り返ったようで、手を振り、行ってしまうたようでようやくこっちを向いた。見下ろしている妻を見つけ、笑顔で挨拶した。佐緒里は軽く挨拶し、顔を引つ込めた。

部屋に戻ると、里香が廊下で、じっと壁を見つめて突っ立っていた。

「里香ちゃん、どうしたの？」

上がっていった里香のしている物を見た佐緒里は、

「まあ・・・」

と息を飲み、思わず里香の両肩を強く引いた。

かびがひどくなっていた。どうしてこんなになっているのに気づかなかったのだろう？と不思議に思うほど急激に。

「ママ、これなに？」

「かびよ。それにしてもひどいわね。里香ちゃん、触ってない？」

「うっん」

「そう。一応手を洗っておきましょうね」

キッチンの流しへ連れていき、そこにも置いてある殺菌ソープでよく手を洗わせた。

里香は不安そうな顔で母を見上げ、

「おうち、けがしたの？」

と訊いた。

「うっん。かびよ。キノコの仲間。でも毒キノコだから触ったり吸い込んだりしちゃ駄目よ？」

「血？」

「血じゃないわ。きつと壁の中の水道管が錆びているのね。錆の混じった水が漏れているのよ」

「ふうん……」

里香はこわごわ壁の方を見た。佐緒里も、なんだか黒くもやもやした陽炎が立ち上っているような気がした。

「大丈夫よ、里香ちゃんを幼稚園に送ったら管理人さんに言ってきたれいにしてもらうからね？」

佐緒里は出来るだけ娘をそちらに近づけないように幼稚園のカバンと帽子を持ってきて準備させると、まだ早い、部屋を出て下へ行くことにした。

エレベーターの前を通るとちょうど上の六階に止まっていて、佐緒里もエレベーターに乗っていくことにした。五階に下りてきてドアが開くと、佐緒里はなんとなく躊躇して、一拍置いて乗り込んだ。里香はエレベーターに乗るときゆつと母親の脚に体をくっつけてきた。佐緒里は「1」を押し、ドアの閉まるのを待ったが、ドアはなかなか閉まらず、「閉」に指を伸ばしたが、そこでまたなんとなく躊躇して、5秒ほど待って、押した。ドアは閉まり、下降を始めた。エレベーターの独特の密閉感、佐緒里も苦手だった。狭い箱の中の音の響きが嫌だし、暗い電灯が嫌だし、こもって濁った空気が嫌だ。娘はぎゅゅと体を寄せ、佐緒里もなんとなく箱の隅に寄って肩を縮めた。

一階に着いた。ドアが開いたが、佐緒里も里香もしばらくそのまま開いたドアを眺め、ゆっくり下りた。

すぐそこ、共用の物置を挟んで一〇一号室が管理人室だ。まだ早くリンコちゃんハルキくんたちは来ていないので先に話だけでもし

ておくことにした。

呼び鈴を押すと、「はあーい」と返事をしてすぐにドアが開かれた。

管理人は平山という五十七歳の男で、額がはげ上がっているが、背が高く、肩幅が広く、シルエツトだけ見ると怖そうだが、顔つきは至って穏やかだ。この手の施設の管理人として独身というのが気になるが、平山は人当たりのよい笑顔で、

「やあ、菊池さんの奥さん。リカちゃん。おはようございます。何かありましたか？」

如才なく挨拶しながら、なんのクレームだろうか？と早くも気弱な表情を覗かせる。佐緒里は部屋の壁の「ひどいかび」を説明し、なんとかしてくれないかと頼んだ。そんなことは自分でしてくれと嫌な顔をされるかと思ったら、平山はひたすら恐縮し、

「そうですか。それはお困りですね？ 申し訳ございません、なにしろ古い建物なものでして。さっそく除去させていただきます」

と頭を下げ、佐緒里の方が拍子抜けして驚いた。

「業者さんに頼むんですか？」

「いえいえ」

平山は苦しい愛想笑いを浮かべて手を振った。

「わたしがやらせていただきます。実を言いますとかびの苦情は多いものですから……。準備をしておきますので……。これから幼稚園ですね？ お帰りになりましたらさっそく部屋にお邪魔してよろしいでしょうか？」

「ええ…、よろしくお願いします……」

この人と部屋で二人きりにならなければならないのかしらと不安に思ったが、

そこへリンコちゃんハルくんママさんたちが下りてきた。

「あらリカちゃんと奥さん。どうかしました？」

「では幼稚園に送ってきますので、よろしくお願いします」

「はい。行ってらっしゃいませ」

平山は里香に笑顔で手を振り、佐緒里は娘に挨拶させ、ママさん仲間に合流した。

道すがらかびの除去の説明をすると、
「あつらあー。だからカビには気を付けなさいって忠告したでしょう？」

二人に笑われてしまった。

「でも管理人さんが部屋のかびの除去までしてくれるなんて、ずいぶん親切なんですね？」

「そう？ ふつうなんじゃない？」

そうかしら？と佐緒里は思った。

「管理人の平山さんって、だいじょうぶ？」

「は？」

二人とも佐緒里の質問の意味が分からず、質問した佐緒里の方が恥ずかしい思いをしてしまった。

「だいじょうぶ…よ？ そういうの得意なはずよ？ あの人、元々小学校の用務員さんしてたのよ。その頃からこのマンションに住んでいて。部屋は別だけど。前の管理人さんがお年でやめるって言うんで、平山さんもそろそろ小学生相手はきついということで、管理人を引き継いで、一〇一号室に越したのよ。だからちよつとした修繕なんか、得意なものよ？」

「あ、そうなの、小学校の用務員さんだったの」

そういう情報は最初に教えておいてもらいたかった。よけいな気を回して恥ずかしい思いをしちゃったじゃないの、と思いつつ佐緒里は素知らぬ顔で

「そう。それなら下手な業者さんより確かかしらね？」
と話を合わせた。

幼稚園に着くと担当の先生に腕のけがのことを報告し、あまり騒がないよう気を付けてくれるよう頼んだ。

マンションに帰ってきて、階段で二人と別れた。リンコちゃんが三階で、ハルキくんが二階で、わざわざエレベーターに乗るほどで

はない。何故か幼稚園の送りから帰ってくるとエレベーターはいつも七階に上がっているのだった。

エレベーターを呼び、一人で乗って五階に上がると、部屋の前に平山がかび除去の準備：除去剤、バケツ、雑巾、新聞紙、ゴム手袋にゴーグル、を用意して待っていた。

「お帰りなさい」

「ご苦労様です」

素性がはつきりして安心した笑顔で佐緒里は挨拶した。

「お部屋はもうお邪魔してよろしいでしょうか？」

「えー……、ええ、よろしいです」

まあ独身女性の一人暮らしでもないのに今さら恥ずかしがるような物もなかったはずだと苦笑いし、

「少々お待ちくださあい」

と、鍵を開けてドアを開けると、念のため一人でさつと室内を確かめた。特に問題もなし。それより……、思わず立ち止まって見てしまう、どうしてこんなに………

ドアを開け、

「どうぞ」

と平山を招いた。

「失礼します。ではまず状態を見させてください」

平山は道具はそのまま、サンダルを脱ぎ、靴下を履いた足で廊下に入った。

「これなんです」

「ああ、これですね。なるほど……」

じっと観察する平山を佐緒里はどんな反応をするかと窺った。かびは、ひどい。

黒い染みが水がにじんだように広がり、その中に黒い濃いまだらが浮かび、その中の三つ四つひどい物の中心から、赤い液体が流れ出ている。壁の内部がどうなっているのか知らないが、構造的にここに水のパイプが通っているとは考えづらい。何故こんな所にこん

なかびが、まったく気づかない内に、生えてしまったのか、理解に苦しむ。

「赤いのは錆び……ですよねえ？」

「いや、これはかびのひどい奴ですね。コロニーが成長して盛り上がってるでしょう？ 植物の出す粘液といっしょですよ」

「はあ……、そうなんですか？ あ、壁の中に何かあるんじゃないじゃありません？」

佐緒里はコツコツと壁を叩く真似をした。

「そうーですねえー……。うーん、なんとも言えませんが、とにかく古いので」

同じ言い訳を繰り返して苦笑いした。

「とりあえず除去するということで。しばらく空き部屋になっていて、人が入って生活するようになったので、急激に活性化したのかも知れません。今取ってもしまた出るようでしたら、オーナーに相談して、本格的に中を乾燥させる工事をしなければならいかも知れませんが……」

それでご勘弁願えませんでしょうか？と平山は佐緒里の顔を窺った。こつちとしてもそんなに本格的な工事になってまた別の住居を探さなければならいのはごめんだ。

「ええ。それでもう出ないならそれに越したことはありませんわね。それじゃあ、お願いしてよろしいですか？」

「はい。作業は一時間ほど終わりますが、薬品の臭いがしますの
で、つごう二時間くらい、部屋を出ていただきたいのですが……」

……

「ええ。そのくらいかまいません」

「そうですか。よろしく願います。ではさっそく」

平山は玄関のドアを開け放ち、新聞紙を敷き、作業の準備を始めた。佐緒里は外から見学していたが、平山が挨拶してゴーグルを掛けたので離れることにした。

二時間……。

さてどうやってつぶそうかしら？と考えて、お買い物も、衣類のお店はまだ開いてないし、スーパーはまだ品物が出揃ってないし。リンコちゃんかハルキくんのお部屋にお邪魔しようかしら？と考えた。まだどちらの部屋も訪ねたことはない。さてどっちにしようかしらと考えて……、ふと、上に視線が向いた。

上……、六階……、六〇五号室……………

かび除去剤の強烈な臭いが漂ってきて、行ってみようかしら、と、佐緒里は歩き出した。

八、訪問

呼び鈴を押すと、

「はい」

と、語尾が疑問系で上がった返事がして、警戒した

「どなた？」

という固い声が尋ねてきた。

「わたし、五〇五号室の菊池です」

「あら、菊池さんの奥様？」

鍵が開き、ドアが開かれた。

「ごめんなさい、お休みじゃなかった？」

「いえ、まだ」

四元奈緒は綿のブラウスに短パンをはき、部屋着だが寝るスタイルには見えなかった。

「何か？」

フレンドリーな笑顔を作りつつ、突然の訪問の意図を測りかねている。

「実は今部屋を追い出されてきたの？」

「えっ!？」

「部屋にひどいかびが出ちゃってね、今管理人さんが薬で除去してくれてるの」

「ああ、そういうことですか」

まさか旦那に暴力でも振るわれたのかとギョツとした奈緒がほっとした笑顔になった。

「ベランダも開けっぴろげて作業しているからこちらにも臭ってくるかも？」

言いつつ佐緒里は我が家の洗濯物も臭いが付いちやうかしらと思っただが、今さらどうしようもない。

「大丈夫……じゃないかしら？」

「ちゃんと戸締まりはしている？ 若い女性の一人暮らしなんだから気を付けてね？」

「はい。お気遣いありがとうございます」

二人ニツコリ笑顔を見合わせて、

「それじゃあ、つと……、行くわね？ お邪魔さまでした」

佐緒里は去り掛けたが、

「あの、」

と奈緒が呼びかけてきた。佐緒里は内心期待しつつ「ん？」と振り返った。

「部屋、しばらく入れないんでしょう？ うちでよろしければ、しばらく時間潰していきませんか？」

「あらいいの？ これからお休みでしょう？」

「無駄な朝型人間なもので、お昼近くにならないと眠れないんです。あ……、散らかってますけど……、どうぞ？」

奈緒は歯を見せて苦笑しながらドアを広く開けて佐緒里を招いた。「まあ、ドキドキするわ。それじゃ、遠慮なく、ちよっと、お邪魔します」

佐緒里は玄関に入り、奈緒から受け取ったドアを閉めると、

『やっぱり若い女の部屋はにおいが違うわね』

と思った。

「少々お待ちくださあゝい」

奈緒ははにかみながら応接間に引込み、佐緒里がチラッと覗くと、ソファアに脱ぎ散らかした衣服を片づけていた。佐緒里はほくそ笑んで知らんぷりしてやり、しかしキッチンに目をやるとインスタント食品のからがビニール袋から溢れそうになっていて、おやあやとお姉さんの気分で苦笑した。

「お待たせ……、あつ、」

奈緒もキッチンの自分の失敗に気づいて苦笑いした。

「独身女の一人暮らしなんてこんなものです」

「よね？ 分かるわよ」

佐緒里が理解のあるところをアピールすると笑顔で「どうぞ」と奥に招かれた。

戸を開け放った寝室に明るい日差しを受けて延べっぱなしの布団が眩しく、家具は少なく、もうそういう歳でもないのだろうが女の子の子した色彩もなく、ただ服だけは商売柄多く、日差しの当たらない奥にハンガーに掛けられてずらっと並んでいた。高級そうだが、佐緒里が羨ましく思うようなタイプの服ではない。

「どうぞ」

応接間に通された。フローリングにソファが置かれ、細長いテーブルが置かれ、テレビと、小型の食器棚があった。

「ちよつとごめんなさい」

佐緒里は網戸の閉められたベランダの戸に行き、くんくんとおいを嗅いだ。

「臭いは……大丈夫そうね？」

部屋の方を向いて安心した顔を見せると奈緒は

「ここまでは、窓の外で拡散して上ってこないでしょう」と言った。

「そうね」

佐緒里はベランダを離れ指し示されるソファに座った。ベランダに洗濯物は干されていなかった。

佐緒里が座ったのはちょうど真下の自分の部屋で自分がテレビを見るときと同じ位置だった。

「うちはテーブルと椅子にしているんだけどね、ちょうどこの壁の廊下側が、ひどくかびちゃったのよ」

言いながら佐緒里は壁を見渡し、自分の部屋はリフォームしてつるんとしたプラスチックの壁紙だが、こちらは縦に繊維の入った凹凸のある壁紙で、なるほど、確かに色がくすんで年季が入っている。「そうなんですか。ご家族でお住まいですもの、わたしの所と違っていろいろ荷物がありになるんでしょう？」

「いいえ。なんにも置いてないのよ？」

「そうなんですか？」

奈緒は不思議そうな顔をした。

「そうなのよお。なんでかびちゃったんだか、さっぱりだわ」

佐緒里の憤慨に

「そうですねえ」

と奈緒は苦笑混じりに同意した。

「お茶をお出したいんですが……、わたし今の時間はハーブティーなんですよ、お口に合うかどうか……、よろしいですか？」

「あらハーブティー？ おしゃれねえ？ いただきます」

奈緒は笑顔でティーポットと二人分のカップを用意した。

「朝ご飯は？ 帰ってきてからは食べるの？」

「キッチンの残骸です」

「インスタントばかり？ 若い女の子があんな物ばかり食べていちや駄目よ？ 体に気を付けなくちゃ」

小言のように言いながら、自分がひどくおばさんぽく映っているんじゃないかしら？と思った。

「何か作ってあげましょうか？」

奈緒はポットからあらかじめ自分用に湧かしておいたお湯を茶葉を入れ、少し考えてもう一さじ入れた大きなティーポットに注ぎながら、

「それはまた今度お願いします。冷蔵庫もインスタント食品ばかりですから」

とやんわり断った。

「うちも冷蔵庫は今は開けられないわね。じゃあまた今度」

と言いつつ、佐緒里は自分がこの女とどの程度本気で親しくなりたいと思ってるのかしら？と自分の心を押し量った。

奈緒は

「どうぞ」

とお皿に載せたティーカップを佐緒里の前に差し出し、

「あら、時間だわ。あの、テレビ、いいですか？ わたし、今毎日

見ているドラマがあつて」

とはにかんだ。

「どうぞ。いただきまーす」

佐緒里はまだ熱いカップを皿ごと持ち上げ、フーと息を吹きながらそつと一口含んだ。奈緒はリモコンでテレビをつけ、他に座るところもないのでソファアの佐緒里の隣に「お邪魔します」と座った。

「うん、美味しいわ」

「そうですか？ よかった。ハーブって癖がありますでしょう？ 苦手な人は本当に駄目みたいですね？」

「そうね。わたしもあんまり好みの方じゃないけど、これは美味しいわよ？」

「そうですか？ リラックス効果があるんですよ？ これ飲まないで眠れなくて」

「たいへんねえ」

ドラマが始まった。こちらもまた韓流ドラマだ。佐緒里は、旦那じゃないけど韓流の花盛りね、とおやおやと笑った。

このドラマは佐緒里は東京の放送局で見ていた。あー、この人がこの人となつてああなつて、と懐かしく思い出していると、奈緒が恥ずかしそうな顔で

「佐緒里さんは韓流ドラマって、見ます？」

と訊いてきた。

「ええ。旦那に呆れられているわ。このドラマも引つ越し前に見たわ。面白かったわよお？」

「あ、そうですか？ わたしも大好きなんです。面白いですよねー？」

「ねえ？」

二人で笑い合つて、奈緒はドラマに集中した。

佐緒里はお茶を味わう。ハーブティーはわざわざ飲みたいような物ではなかったが、このお茶は、多少鼻につく独特の香りがあるが、ミルクのような自然な甘みがあつて美味しく飲めた。

ドラマに集中していた奈緒がCMになって思わずふうとため息をつき、空になった佐緒里のカップに気づき、

「あら、お代わり入れますね」

と受け取り、大きなティーポットに一度に作った残りを注いだ。

「ありがとうございます」

佐緒里はお代わりを受け取ると気に入ったように香りを嗅いだ。

奈緒もぬるくなった自分のお茶を飲み、長々通販の宣伝をやっている間に自分もお代わりを注いだ。ドラマが始まると、

「ついついのめり込んでいますよね？」

と、自分自身の独り言のように言った。

「そうよね」

静かに同意し、おつき合いで自分にとっては再放送のドラマを見つつ、隣の年下の女の子の人生を思った。悪い男に引かかったって言うていたけれど、この質素な暮らしぶりを見るとどうも本当らしい。キャバクラなんて、実際のところドラマみたいなきらびやかな物でもあるまいし、韓流ドラマなんて、自分よりよっぽどのめり込んで夢見ちゃってるんでしょうね……、と思う。

奈緒に好ましい感情を持って、このまま本当にお友だちになれるかしら？と思うていたが、急に、お腹の調子がおかしくなってきた。イタタタタタ……、と差し込むように痛み出し、次第にそれが我慢できないものになってきた。佐緒里は生唾を飲みながら青い顔になって、

「ごめんなさい、おトイレ、お借りしていいかしら？」

と尋ねた。

「どうぞ。場所は……、分かりますよね？」

佐緒里のせっぱ詰まった様子にまるで気づかぬように奈緒はドラマに集中したまま気軽に言った。佐緒里にとってはその方がありがたい。

「ごめんなさいね、お借りします」

テレビの前を横切らないようにベランダ側の出口から出て、壁に

手をつき、ズキンズキンと突き刺すような痛みにお尻を引き締めよたよたした足取りでトイレに向かった。トイレのドアを開けると、まだよ、まだ出しちゃ駄目よ、と必死に自分を励まし、カバ―を持ち上げる間ももどかしく、パンツを下げると慌てて便座に座った。

思いつきり下してしまった。今朝はドタバタしてトイレに入っていなかった。壁一枚隔てた応接室の隣で、それよりドアが薄く、

『聞かれた……』

とひどく恥ずかしく思った。個室にこもる臭いも我ながらひどい惨めな思いをしながら、まだお腹は痛み、しばらく便器から立ち上がれそうになかった。頬を痙攣させながら、ああ・・、と息をつき、お腹をかばうように背を丸めじつとしていた。

もう大丈夫？と自分のお腹に具合を尋ね、まだはつきりしない様子にこの状況を呪った。なんだってよりにもよってこんな時に？

かびのせいだろうか？ いや……、お茶のせいか……。ダイエツト用に下剤成分が混じっていたのかも知れない。それを美味しい美味しいと飲んでしまった。自分の間抜けぶりに腹が立ち、自分にお茶を勧めた女を憎らしく思った。お腹がぐづぐづ煮たつてお尻が溶け落ちて大穴が開きそうな切ない痛みに惨めな思いがした。ふと、足下に置かれたエチケツトボックスに目が止まった。結婚した今は置いてないが、独身時代は自分のアパートのトイレにも置いていた。腹からお尻へ水っぽい痛みにじつとしたまま、ピンクと白のプラスチックを見つめ、自分でもどいうつもりか、蓋を開いてみた。使用済み生理用品が剥き出しでビニールに投げ入れられていて、赤い色がまだ生々しくてかっていた。

汚らしい、と感じ、蓋を閉じた。人様のプライバシーを覗いた後ろめたさもあるが、腹の痛みに全てが腹立たしさに変換されてしまった。

お腹がすっかり空っぽになって、まだ違和感はあるが痛みは収まった。もうすっかりやけでカラカラ音を立てて大量のトイレットペ

パーを巻き取り、お尻を拭き、すっかり萎えてしまった脚を立ち上がらせると、便器の中身を見ないように「大」をひねった。ゴゴゴゴ、と詰まった音が穴の底へ殺到していき、きれいさっぱり流れてしまえ！と睨み付けた。

トイレを出ると、そつと洗面所に入った。自分の物より奈緒の生地に触れてしまったようで、不潔に感じて液体ソープでしつこく洗い手を洗った。

体調が悪くなったせいがかびの臭いが濃厚に鼻を突いて感じられた。

洗面台の隣に置かれている洗濯機も自分の所の物より古い型で、プラスチックが黒ずんでいた。特にその裏側からかび臭さを感じられた。足元に脱衣かごがあり、空っぽだったが、佐緒里は洗濯機の蓋を開けて中を覗いた。下着類が投げ込まれていて、その中に黒い色が紛れ込んでいた。男物の靴下だった。なんで男物の靴下が入っているのだろうか？ 自分なら絶対ブラなんて洗濯機でそのまま洗わないし、絶対旦那の脱いだ靴下なんて下着といっしょに洗わないのにと思いつながら、その黒い靴下が旦那の持っている物とそっくりなのに気づいた。確か昨日この靴下を出してやったんじゃないか？ 確かにそうだ、縦に線が入っていて、ワンポイントがあつて……。

……その靴下を、どこで脱ぎ忘れてきたって？

昨夜すれ違った旦那の背中からにおった香水の香りが甦った。

自分のよく知っている香りだ。好きなブランドの物で、独身時代は愛用していた。

四元奈緒も同じ香水を使用している。

「不潔な女」

鏡を見ると、ひどく暗かった。

鏡の中の女に

誰、これ？

と思った。知らない女だ、自分の、全然。こんなに恨みがましい、

人を憎む目は、見たことがない。

応接間に戻ると、奈緒はテレビを見つめてぼろぼろ涙を流していた。ちらりと見た佐緒里は、ああ、あのシーンね、と思った。

ここのキッチンにはまともな包丁はあるのかしら？

切れない包丁は、かえって痛いわよ？

番組はもう終わりにさしかかっている。後半はほとんどトイレにこもっていた。

さて大好きなドラマが終わってしまう前にキッチンの戸棚を調べさせてもらおうかしら？

ポケットの携帯電話の呼び出しが鳴った。奈緒が赤い目で佐緒里を見上げた。

「ごめんなさいね」

佐緒里は玄関の方へ行って携帯を取り出した。

「はい」

『もしもし。管理人の平山です』

「はい」

『かびの除去が終わりましたのでご報告を』

「はい。ごくろうさまでした」

『どこかにお出掛けですか？ このまま戸締まりしてまいりますので、お帰りになられましたら管理人室にお声掛けください。いっしょに部屋に参りますので』

「・・・いえ。今マンションのお友だちの所にいますので、これからまいります」

『ああ、そうでしたか。それでは部屋の前でお待ちしております』

佐緒里は電話を切って応接間に戻った。

「かびのお掃除、終わったんですか？」

「ええ。戸締まりのこととかあるからいったん戻るわ」

「そうですね。ドラマもちょうど終わったところで、わたしもこれから逆転の睡眠タイムです」

「おじゃましちゃったわね？」

「いいえ。お友だちが来ることなんかありませんから、楽しかったです。よかったらまたどうぞ。この時間帯なら……テレビ見てますから」

佐緒里はニツコリ作り笑いを返した。ずつつと座を外して、トイレにこもっていたのに、まったくおくびにも出さないで、なんて嫌味な女かしら。

「ああ、奥様。お待たせしました」

「いいえ、全然。かびは？きれいに落ちました？」

「ええ。どうぞご覧ください。まだ臭いはしますが」

換気のために開け放してあるドアを入り、確かにツーンときつい、明らかに体に悪い薬品の臭いがした。

壁は湿って染みが広がっていたが、黒くはなく、どうやらかびはすっかり除去されたようだ。いっしょに入ってきた平山が説明した。「このまま自然乾燥してください。ドライヤーなんか当てますと壁紙が伸びてしわになってしまいますから。ベランダ側の窓、開け放って、台所の換気扇、回してます」

回っている。

「もうしばらく、申し訳ないですが後一時間は部屋から離れていてください。玄関の鍵だけ掛けて。大丈夫だと思いますが、防犯のため、念のため部屋に入る前にお声掛けください。いっしょに参りまして、安全を確認いたしますので」

「ご親切にどうも」

佐緒里はニツコリねぎらいの笑顔を見せた。

「ところで、他の部屋もこんな風にひどいかびが発生したりするの？ 例えば、上の六〇五号室とか？」

「六〇五号室……、四元さんのお部屋ですね……、いえ、六〇五号室からかびの苦情が来たことはございませんね」

「そう。じゃあうちももう出ないように換気に気を付けなくちゃ」

「相済みませんが、どうぞよろしく願います」

ぺこぺこお辞儀する人の良さそうな平山を、佐緒里は冷たい軽蔑の目で眺めていた。

表通りのお店を回って時間を潰し、お昼を回ってから帰宅したが、薬品の臭いはまだだいぶん残っていた。外食で済ませてくれればよかったが、腹具合が不安でスーパーで安い二個パックのおにぎりを買ってきた。そういえば平山が部屋に入る前に声を掛けてくれて言っていたっけ？ もう入っちゃった。平気よ。

冷蔵庫の麦茶でおにぎりを食べたが、やっぱり臭いが気になって食欲が湧かなかった。

テレビも見たくなくなって、ひたすらぼうつと過ごした。

トイレに入ってふつうに小用を足し、ほっとして洗面所で手を洗った。鏡を見る。自分の顔だ。

ふと見ると、ドアの開いた風呂場に男が立っていた。

異常な男だった。

下着のシャツが真っ赤に汚れ、手に包丁を持っていた。

佐緒里はズルズルへたり込んだ。

頭を抱えて、ぐずぐずと泣きじゃくった。

「こんな部屋……、もう、嫌……」

九、幽霊部屋

帰宅した夫と佐緒里はひどく言い争った。ほとんど一方的に佐緒里がののしったが。それまで一度も使ったことのない汚い言葉で夫をののしり倒した。夫は、戸惑った。

「おい、やめろよ、里香が怖がるだろう？　いったいどうしたって言うんだ？」

妻の豹変ぶりが、まったく理解できない。

「四元奈緒とどういう関係よ！？」

「え？　誰だつて？」

「白々しい！　上の、六〇五号室のあなたの愛人よ！　ここに引越す前から下見に来ていて、あの女ともそういう関係になっていたんでしょ！？」

「なんでそうなるんだよ？　ああ、上の人なら…、挨拶したけど…。夜勤に出ている、看護師さんだろ？」

「はああ？　なに白々しくしらばっくれてんのよ？　看護師？　はああ？　バツカじゃないの？　ホステスよ！　キャバクラの！」

「ああ…、そうなのか？……」

「ああそうなのか？　はんっ、白々しい。タベもお店で会ってたんでしょ？　キャバクラで、どんなサービスされてんのよ？　キャバクラで靴下脱いでしてもらうサービスって何よ？　ええ？　お店じゃなくって、二人で抜け出してホテルで仲良くしてたんじゃないの？　ええ？」

「靴下脱いで、って、なんのことだよ？」

「あなたの靴下があつたのよ！　あの女の部屋の洗濯機の中に、あの女の下着といっしょに！　いやらしいっ！！」

「靴下って……」

夫はカバンを開け、中から一組の黒いソックスを取り出した。困った顔でじつと様子を窺う夫に、佐緒里はわめき散らしていた興奮

をそがれ、ポカンと口を開けて夫の手のソックスを見つめた。

「どこに……」

「料理屋の座敷席に上がって、その時脱いで、なくしちゃ悪いと思
ってカバンに入れておいたんだ。もうだいたい酒が入って、俺も失念
していた。ずっと立ち仕事で臭ってたから足を拭かせてもらった……
…みたいだ。よく覚えてないけど」

夫はじいっと妻の表情を窺った。

「カバンに……ずっと入っていた……」

「そうだよ」

誤解が解けたかと少しほっとした夫は、異臭に顔をしかめた。

「なんだこのにおい？ 臭いぞ？」

「……かび……。ひどかったから、昼間管理人さんに除去剤できれ
いにしてもらったの……」

「そうか。ま、古いからな。そうか、この臭いのせいだな、苛々し
ているのは」

夫は妻の異変を化学薬品のせいにして、笑顔で丸く収めようとし
た。

しかし妻はジロツと怖い目で夫を睨んだ。

「分かった。部屋に入る前にあの女から返してもらったのね？」

「は？ おいおい、疑うのもたいがいしてくれよ。上の人とは挨拶
しただけだし……おまえの友だちなんだろう？ 俺はキャバクラ
みたいな所で遊んだりしないって」

「嘘。くそう、あの泥棒猫、尻尾を掴んでやる」

「おいおい、佐緒里！」

「ここに靴下があるってことはあの女の部屋にはないってことよ。
くそう、あなたとの仲をとっちめて、はかせてやるう」

佐緒里は夫を突き飛ばして外へ出ていった。

「おい！ 佐緒里！」

夫は追いかけてようとしたが、一人取り残される娘を気に掛けてす
ぐには出られなかった。

その間に佐緒里は廊下を走り、階段を駆け上がり、六〇五号室に來ると、チャイムを鳴らし、苛々と、ドン！ドン！と鉄のドアを叩いた。

「四元さん！ この嫌らしい泥棒メス猫！ 開けて嫌らしいメスの顔を見せなさい！ 人の亭主寝取ったやらしい顔を見せるお！ くらあつ、出てこおい！！」

ドン！ドン！ドン！

「男物の黒靴下見せてみなさいよお！ うちの亭主とラブホテルにしけ込んだ証拠の靴下、見せられるものなら見せてごらんなさいよおおっ！？ ほらああつ、さつさと開けやがれ、すべたっつ！！」

「おい佐緒里い！ やめろよ？」

走ってきた俊典がドンドン、ドアを連打する佐緒里の手を慌てて掴んだ。

「やめてくれよ？ほんとにいったいどうしちゃったんだよお？」

「出てきやがれ、ちきしょおおおっ！！！」

暴れてドアを蹴る佐緒里を俊典は引き剥がして羽交い締めにした。隣の部屋のドアが開いた。気の弱そうな老人が怖そうに顔を覗かせて言った。

「あのおー……、四元さんなら三〇分ほど前に出かけましたが……」
「ほら」

佐緒里は俊典を睨んだ。

「帰宅するあなたと待ち合わせて靴下を渡したのよ」

「まだ言うか」

俊典は泣きそうになり、他の住人の手前もなく妻を自分に向き合わせるときつく抱きしめた。

「佐緒里。落ち着け。な？、落ち着いてくれ」

そして腕をゆるめると、しっかり顔を向き合わせた。

「おい、俺を見る。な？しっかり見る」

佐緒里はふてくされた顔で夫を睨んだ。

「俺はおまえを愛してる。浮気なんて絶対にしていない。本当だ。」

俺はおまえに、こんな嘘は絶対につかない。な？、分かるだろう？
愛してるんだ、おまえを。佐緒里。」

佐緒里の表情が徐々に弛んで、不安と怯えが現れた。

「あなた……、わたし……、いたい……………」

「大丈夫か？　落ち着いたか？」

佐緒里は視線を下に向けすっかり弱気になった顔でうなずいた。

「よし。里香が待ってる、里香の所に帰ろう」

佐緒里はコクンとうなずき、俊典は彼女の肩を抱き、ドアから覗いている老人に軽く挨拶して歩き出した。

部屋に入るのは心配だったが娘を一人にしてちゅうちょも許されず、とにかく入った。

「待ってる」

玄関に妻を待たせ奥へ向かうとベランダのドアと窓を全開にした。
娘里香は大人しくテレビを見ていた。夫婦で大声で怒鳴り合って、
精神状態が心配だが、今は妻の方が危ない。玄関に戻り。

「外に食べに行こう。この薬の臭いは危険だ」

佐緒里は力無く首を振った。

「外は……嫌……。人に……会いたくない……………」

「そうか？」

俊典は不安に思ったが、

「ごめんなさい、あなた。どうかしてました。少し前からわたし、
変なんです」

と、佐緒里は落ち込んだ顔で素直に謝った。

「そうだったのか？　いつ頃から？」

「うん……………、二、三日前から……………」

「そうか……。この臭いのせいじゃないんだな？」

佐緒里はコクリとうなずいた。俊典は、それでは新しい環境が、
除去したというかびのせいだったのかと考えた。

「そうか……。ここに居て、大丈夫か？」

「うん……。里香もいるし……。もう、大丈夫よ」

佐緒里は顔を上げ、もう大丈夫、を頑張ってアピールした。俊典は眉を下げ、うん、とうなずいてやった。

「それじゃあ……。何かデリバリーするか？ 確か宅配ピザの広告が入っていたよな？」

「ええ、そうね。里香も好きだし」

「そうだな」

夫婦で微笑み合った。

「おおーい、里香。ピザ注文するぞー」

「わーい！ やったー！」

テレビを見ている里香が素直に歓声を上げた。

ピザが届き三人で食べた。窓をずつつと開けっ放しでようやく臭いも気にならなくなってきた。

食べている間に風呂が沸き上がった。

お先にどうぞと言うので俊典が先に入らせてもらうことにした。

正直体が汗でべたべただった。

「里香の体だけ先に洗ってくれる？」

「ああ、いいよ」

気軽に引き受け

「よし、里香、さっさとさっぱりしちゃおうな」

といっしょに洗面所に入った。里香も昨日お風呂を我慢して汗をかゆがっていた。二人で服を脱いで風呂場に入り、俊典は自分も早く上がるようにしようと思った。

里香に包帯を巻いた手が濡れないように上げさせて、シャワーで流して大急ぎで体を洗ってやった。頭も洗ってやり、

「里香も顔が濡れるのが平気になって、大人になったなあ」と褒めてやると喜んだ。

ガラガラ・・・と戸が開いて、佐緒里が洗面所に入ってきた。里香

の体をタオルで簡単に拭いてやり、

「ほい、出来上がりー」

ドアを開き、バスタオルを構えて待っていたママへ送り出した。

「アイス！」

「はいはい、ちゃんとパジャマ着てからね」

ピザのおまけでアイスが付いてきて、お風呂を上がったからと約束してある。ガラガラ、と戸が開き、二人仲良く出ていった。

湯船でさつと温まり、体を洗った。洗いながら、佐緒里と里香を東京に帰そうかと考えた。土日はほぼ確実に仕事は休みなので、こっちに単身赴任で週末に帰ればいい。新幹線で二時間、高速でも四五時間の近さだ、平日五日くらい別れていても大したことはないだろう。

頭を洗っていると、ガラガラガラ・と戸が開いて、佐緒里が入ってきたようだ。なんだろうなと思っていると、風呂のドアが開いて、白い脚が入ってきた。俊典は頭を洗っている手を止め、見上げた。裸の妻が微笑んでいた。

「おいおい、里香は？」

「アイスとテレビに夢中。一人でお風呂に入るのは怖い。いつしよに、いいでしょ？」

「しょうがねえなあ」

狭い風呂場に大人二人で、面倒くさそうにぼやきながら、いっしょに風呂に入るなんてどれくらいぶりだろうとにやけた。

佐緒里は俊典の肩に左手を置いて、右手を伸ばして桶で湯をすくい、体を流した。俊典の体にも半分掛かる。コトン、と桶を置くと、佐緒里は妖しく微笑んで夫の背中に覆い被さってきた。

「おいおい、よせよお、まだシャンプー流してねえぞ？」

俊典はフックに掛けたシャワーを出し、頭を流した。背中に負ぶさる妻の髪もシャワーに濡れて俊典の首筋にまわりついてきた。俊典は妻の女らしいなまめかしさに体が熱くなった。

しばらくして。

俊典は悲鳴を上げて風呂場から飛び出し、洗面所からも飛び出してくるとガラガラピシャン！と引き戸を閉めた。風呂場からそのまま飛び出してきたので体は濡れたままで、床はたちまちびちゃびちゃになっていった。

振り返った俊典は、

「うわあっ」

と、またびつくりした悲鳴を上げた。佐緒里がすぐ後ろのキッチンに流しを向いて立っていた。

「さささ、佐緒里、やややや、やつぱり、ぶぶぶ、無事だったか」

「なあにあなた？ 無事って、なんのこと？」

俊典は戸を両手で押さえて泡を食いまくりながら言った。

「いいい、今、おおおお、お、女が来て、そ、それから…、うわあっ！」

振り向いた妻にまた悲鳴を上げた。佐緒里は手に包丁を握っていた。それは何か明日の弁当の下ごしらえをしていたのかも知れないが、目が再び据わっていた。

「さ、佐緒里？」

「女が、そこにいるのね？」

佐緒里は手に包丁を握ったまま洗面所に入ろうとした。

「どいてあなた。でないとあなたも…」

「よ、よせ！ お、お、お、女がいるが、女だけじゃないんだ、後から男が入ってきて、包丁で女を……」

風呂場からバシャン！バシャバシャバシャツ、と尋常でない激しい水音が上がった。俊典は顔面蒼白になり、佐緒里は冷たい顔でじ

つと磨りガラスの奥を見ている。

水音が止まった。と、ガラツと風呂場の折りたたみ式ドアが開いた。

「ひいっ」

俊典は思わず悲鳴を上げて引き戸を離れ、握った包丁を恐れつつ妻の肩を掴んで下がらせた。

ビチャツ、ビチャツ、と水を滴らせて何者かが風呂場から上がった。ビチャツ、ビチャツ、影が近づいてきて、肉付きのよい男のよう、白いシャツの胸の辺りが真っ赤だった。顔が分かるほど近づいてくると、その手には佐緒里のように包丁を握っていた。

「ひ、ひ、ひいい」

俊典は戸を押さえるべきか逃げるべきか迷ったが、磨りガラスのすぐ向こうに男のギョロツとした目が浮かんで、逃げる方を選んだ。「ねえ、ママあー、パパあー」

娘が呼んだ。

「りっ、里香っ！」

俊典は妻の腕を掴んであたふた居間に向かった。背後でガラガラガラと引き戸が開いた。

「ひっ、ひっ、ひいい」。り、里香あ」

ベランダに出て、お隣に逃げられるだろうか？

「パパあ、ママあ、テレビ、変なのやってる」

「り、里香、テレビなんかいいから、に、逃げるぞお！」

「ほら、見てえ、変なお」

俊典は振り返り、胸から顔に真っ赤な返り血を浴びた中年男が出てきたのを見て泣きそうになった。

「り、里香あ、逃げるんだあー」

「ほらあつ、見てえっ！」

「早く……」

娘を椅子から下ろそうとして、頑固に指さすテレビを見た俊典は戦慄し、下半身から力が抜けた。

テレビ画面いっぱいに気味悪い青白い顔の人間たちが映っていて、それはまるで俊典たちを見て、こちらに出てこようとしているようで、気づけば、

『うんおおおお、うんおおおお、うんおおおお』

と読経の合唱が大声で流れ出ている。俊典はそれを直感的にこの世の物ではないと思った。

「ひ、ひ、ひいーん……………」

俊典は娘を捕まえたまま床にへたり込んだ。

洗面所から出てきた包丁男は居間には入ってこないでまっすぐ廊下を歩いていった。するとその後から、今度は赤と白のワンピースの女がびしょ濡れになって滴を垂らしながら、ビタン、ビタン、と出てきて、ワンピースの上半身が真っ赤なのは、刺された胸から流れ出た血なのだった。

ずぶ濡れで長い黒髪の女は、居間に入ってきた。俊典は妻と娘を抱き寄せてぼろぼろに泣いていた。

反対の方から包丁男も入ってきた。俊典は二人を抱きしめひたすら小さくなった。

包丁男と流血女はテーブルの向こう側を左右から歩いてきて、お互い同じ極同士の磁石が反発し合うようにスルツと避けて、反対へ離れていった。

二人がそれぞれ出口から出ていって、俊典はひとまず脱した危機にむせび泣いたが、テレビ画面の白い光がもやのように広がり、白い着物を着た亡者たちがこっちの世界に溢れてきた。彼らは俊典たち家族を見ていた。手を伸ばし、

「んーまあだあー、んーまあだあー、」

と、何千何万回と唱えてすっかり輪郭の崩れてしまった経文をうなりながら生者の肌に触れようと押し合いへし合いした。

「きゃあっ、パパあーっ」

「あ、あ、あなたあっ」

二人にもそれは見えるようで悲鳴を上げて俊典にしがみついてき

た。

「ひ、ひ、ひいゝゝゝっ」

俊典は二人をかばつてもう訳も分からず床を這いずりながら廊下へ向かった。向かう先に亡者たちの白い、青黒い血液が流れていそふな足の林がひしめき、俊典はひいひい悲鳴を上げながらそれを押しつけ進んだ。手応えはなかった。やはりこの世の物ではないのだ。しかし触ると、ヒヤリとして、自分の肉体の内部を冷たく湿った空気が通り抜けるような感じがして、ひどく萎えた。

「に、逃げるんだ、ここから脱出するんだ」

亡者たちの群から娘をかばって抱きかかえ、腰にすがりつく妻を励ました。亡者たちは手を伸ばして俊典の裸の背や肩を触ってくる。風邪をひいて高い熱が出たときのようにゾクゾクした寒気がした。

廊下に這い出すと、すね毛の生えた生々しい足が立っていた。見上げた俊典は包丁を握ってこちらを見下ろしている男と顔を見合わせ、

「うわああっ、」

と思わずのけぞった。娘を抱きしめ、妻がしがみついてくる。

「んーまあだー、んーまあだー、」

読経の声が充満し、こちらを見下ろしていた男は興味を無くしたように前を向き、歩き出した。白い亡者たちがふらふら歩く中、血まみれ女が紛れて歩いていて、男とまるで相手を感じしないようにすれ違った。今度は女がじつと下を見て近づいてくる。

「ひ、ひ、ひ、ひいゝゝゝ」

俊典は再び這いずり、キッチンの手拭きのタオルを取ろうとしたが亡者がいて断念し、玄関の緑色の扉のノブに飛びついた。ガチャガチャ回し、開かないドアに焦り、ああ鍵を掛けていたとガチャリと回し、冷たい外気の流れ込んできたドアの外へ飛び出した。

男が立っていた。

「うわあああっ」

俊典は悲鳴を上げた。

「どうされました？菊池さん？」

管理人の平山だった。

俊典は亡者たちが向かってこようとするドアをバン！と閉めた。
冷たいドアにすがりついてへたり込んだ。

「あ、あなた……………」

「パパあ……………」

妻と娘が怯えた声を出して俊典にすがりついてきた。その必死の様子に

「え？ ええ？」

まだ何があると言った？とすっかり泣きたい気分で通路の左右を見た俊典は、ビクツと身を震わせ、ゾツとした。

管理人の平山は微笑みながら、その顔は非常に淡泊だった。

左右の部屋部屋のドアが開き、各部屋の住人たちが顔を覗かせていたが、どれもこれも、非常に意地悪な顔で、薄ら寒い微笑みを浮かべ、俊典たち家族を眺めていた。

俊典はドアに背を付け、ぺたんとお尻を付いて、すっかり意気地が砕けてしまった。

「なんなんだ…………、なんなんだよお、このマンション……………」

佐緒里が決死の思いで部屋に戻り、夫の衣服と財布を持ち出した。
夫の問いに中の様子は「分からない」と答えた。

一家は駐車場の車に乗り込み、マンションを離れると、その夜はそのまま車の中で過ごした。

翌日、佐緒里と里香は取る物とりあえず東京の実家へ帰った。

俊典は車中泊を続け、工場から帰宅後明るいうちは引っ越しの準備を進めている。

おわり。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6965v/>

アケボノハイツ五〇五号室

2011年9月15日03時22分発行